

上級の學年兒童に對しては、前々よりの練習を確實になして、之に熟練せしむる外に、更に豫定の作法材料を授與し、教師先づ身を以て範を示し、之が實習を全うせねばならぬ。たゞ受持の教師のみが、教授の時ばかり作法を行ふではいけない。各教師共、平素より相互禮儀作法を以て交はり、兒童生徒の範とならねばならぬ。特に上級學年兒童には、祝祭日儀式、兩陛下及皇族の尊影に對する心得、社會公衆に對する作法、祝賀、祭忌、告送別、訪問、迎接、外國人に對する心得等、修身教材と結び付けて、やゝ高尚なる作法を授けるがよい、尙ほ作法教授に附帶して平素の禮儀作法(土地の習慣に依れる)等に關する一般の常識を養成するやうに心がくるがよいと思ふ。

(三) 『アルコール』につきての教授

飲酒喫煙の害あることにつきて、今や世界各國ともやゝ覺醒しつゝある傾きなれども、そは一部分有識者間に於ける強き提唱だけにして、一般は滔々としてこの風習に馴致せられつゝあることは争ふべからざる事實である。就中飲酒の害即ちアルコールの害毒は、當人の身心に多大なる影響を受くるのみならず、延いて子孫の上に影響し、間接的には、一家内のものに意外なる悪影響を與ふることにもな

る。されば、小學校に於ては適當の機會に、アルコールの害毒につきて教訓する必要があると思ふ。特に、上級學年の兒童に對しては、修身科は勿論、理科の教授をなす際に、飲酒の害毒が如何に人生に悲惨なる影響を與ふるものなるかを、訓諭するがよいと思ふ。

喫煙の害につきても適當の機會に於て教訓したいが、吾人のこゝに言はんとするところは、即飲酒の害である、吾人は茲に禁酒或は節酒論をなすのではない、また之を論ずるの必要はない、一般の家庭及び社會の上下を通じて、必要上酒をとり烟草を要しつゝあるので、吾人が茲に之を論じたからとて、どうのかうのといふ反響はないのである。されど飲酒に耽溺せる結果は、歴然恐るべき害毒を残すものなれば、單に之につきての害毒をば、上級兒童に納得せしむるやうにしたいと思ふのである。我が小學校の教材には、この種の注意をなす機會に乏しいのであるが、修身上及び生理上より之につきて教ふる機會を作りたい。獨乙の各小學校にては飲酒の害に關する教授要目を作製してある、其大要は左の通りである(横山榮次氏著 教育教授の新潮に據る)

『第一學年第二學年にては讀本に連絡して、ビール、葡萄酒の害を教へ、第三學年にては理科國語の教授にて、アルコールの害を授く、第四學年にては理科にて授く。……其要目の摘載は之を略す。』

第五學年(理科)の教授にて次の事柄を教ふ

- 一、人間の食物に於ける『アルコール』の地位及び價值、
 - (一) 人體に必要な物質、
 - (二) 普通食物に包含せらるゝ蛋白質の物質、
 - (三) 『アルコール』の成分、
 - (四) 右二つのものゝ精細なる比較、
 - (五) 『アルコール』に對して支出せらるゝ費用、
 - (六) 『アルコール』と貧乏、
- 二、實際上の指導、即ち有害なる飲物に代るべきものに就て、
- (一) 適當なる食物―強き藥味を避けること、
 - (二) 代りの飲物、

(三) 果物

第六學年理科に於ては、又左の事項を授ける、

一、人間の活動に對する『アルコール』の害、

- (一) 身體上の活動―筋肉の力を減すること、
- (二) 精神上の活動―視覺の不確なること、及び記憶弱くなり、且つ思考力の緩漫となること、

二、『アルコール』は犯罪の原因となること、

三、訓戒

- (一) 女兒に對しては、飲酒家と共に舞躍を爲したり、散歩を爲したり、及び結婚を爲すべからざること、
- (二) 男兒に對しては、飲酒家と交際すべからざること、
- (三) 禁酒會員たるべきこと、

第七學年にも前に同じく理科の中にて『アルコール』の子孫に及ぼす害といふことを授ける、

- (一) 細胞の作用及び『アルコール』の細胞に及ぼす影響、
- (二) 子孫に及ぼす病氣、白痴、心臟の發育不十分、
- (三) 意志薄弱にして犯罪に陥り易きこと、
- (四) 母の乳の干上ること、
- (五) 肺病に罹り易きこと、
- (六) 飲酒家の子孫は夭死をすること、

右教授要目の當否は、こゝに判斷する限りにあらずといへども、極端なる意見も無いではない。而し『アルコール』の害毒につきての教授としては参考とすべき點が多々ある。もし之を道徳上より論ずれば、尙數ふるに違あらざるほどの害惡が伴ふてゐる、青年期に於て、一身の方向を誤る大多數は、酒の害より胚胎してゐる、吾人は我が教師諸君の注意によりて、終學年兒童に對するこの種の教授に努力せられんことを切望する次第である。

(四) 男女兒童に對する教授上の注意

こは、改めて論議する必要もない、實地教育に従事せる諸君は、男女の教育方法につ

男女兒童に對する教育者の注意

き、特種の注意をとられつゝあることゝ信ずるのであるが、高學年に進むに従ひて、教材の取捨は、勿論、教授方法の上、に於ても、大に、手加減をせねばならぬ。然るをや、やもすれば同教材を課して、之を男女兒に適切に教訓すること能はざる、否適切に教訓しない教師もある、こは教授上に於ける甚だしき缺陷であると思ふ。一體尋常三學年頃よりして、男女の性は著しく分化する、尋常五學年となると其性情が、ズツト異つてくる、男子と女子とを同一學級に編制せるならば、之が擔任教師たるもの一層注意すべく、男兒には教材を男性化すべく、女兒には女性化して教授せねばならぬ。若し又男兒のみの學級ならば、男子としての教材取扱ひをなすべく、女子の學級ならば女子相應の取扱ひをなすべきである。又高學年に進みては、男子として女子に對する心得、女子たるものの、男子に對する心得等をも教訓せねばならぬ。上級學年に於て、男女の關係につきて、教訓するところが、比較的、少く、且つ、無頓着であるやうに思はるのであるが、こは現教育の缺點ではあるまいか。男子は女子のことゝいへば或は嘲笑を以て迎へ、或は相手とするに足らぬものゝ如く思ひなし、一向に顧慮しない。又女子の方にては、男子に關するとは、恰も見世物でも見る

が如き心地にて面白半分に取り扱つてゐる、されば兩者の關係につきて適正なる教訓が行はれない。吾人は敢て男子に、女子のことを知らしむべしといふにあらず、又女子に、男子のことに關與せしめよといふにもあらず、たゞ兩者を教育する上に於て、單に一方にのみ偏屈せる現今の教育方法を批難せるまでである。優良なる國民とは、一家の主人として優良なる男子、主婦として優良なる女子をいふのである。男子の教育にのみ力瘤を入れ過ぎて、女子教育を等閑に附することも、吾人の遺憾に思ふ點である。終學年擔任教師たるものは、青春期に近き男女兒の教育に關はるものなれば、男女の心性につきての研究に油斷あつてはならぬ。尙ほ兩者の關係につきて慎重に教授すべきである。この種の教訓をば、よそ事の如く思ひなしたるは、實に現教育の未だ到らざりし點である。

女子教育につきて附言する。上級學年に進むに従ひて、彼等には特に、精神教育をなす必要がある。スチュワードミル氏曰く「女子に其精神を働かしむる如き教育を興へよ。然るときは彼等は亦羽毛、美飾に於て愉快を感ぜざるに至らん」と。げに女子教育の根本義はこの點に於ける大なる注意をとるにあるべしと信ずるので

女子教育
上の注意

ある『女子教育』紙上にて下田次郎氏は「教育の力を借るべし」と題して左の如く述べられた。

下田文學
士の意見

如何にして、婦人の虚榮心を除かぬまでも、減するを得るかといふに、そは教育を施すに在り。婦人を教育して、頭を作り、腕を仕上げ、身につける本當の價値を、吹けば飛ぶやうなる果敢なき飾りに代へて、貴ぶやうにせしむるにあり。人の精神は、外見よりも、貴きものなることが、よく納得できれば、婦人なりとて、めかすことにのみ、うき身をやつすものにあらず。今日虚榮心のみ盛んなるは、畢竟なほ教育足らず、見えの外に示すべきものなき證據なれば、婦人に十分の教育を興へ、自ら熱心に精神に研きをかくることを心掛くべきなり。云々

滔々たる社會、上下を擧げて、華奢に耽溺せる中に、女子の如きは虚榮心に驅られて、華美に心酔し、黄金に垂涎し、節操も業務も放擲し、驕奢の巷に彷徨せんとするものが多い。終學年時代の女子教育に従事する者は、餘程教權を確立して、女子のため、に精神教育をなし、婦道特に日本婦人の天職につきて、教訓して、貰いたい。

九 修身科教授法

修身科教授には、各種の場合がある。徳目につきて教訓する場合、人物の事例を説明する場合、或は事實より入りて格言諺辭に總括する歸納的の教授法あり、或は既授の格言諺辭等より出發して、個々の事例に引照する演繹的の教授法もある。或は作法教授といひ、或は偶發的の教訓といひ、それ／＼教授の實施工合に相異するところがある。されば本科教授法をば、一定の形式にて論ずることは出來ない。吾人また本書に於て、教授方法につきて、委細研究するの必要を認めぬ故、こゝに終學年教育の立ち場より、聊か修身科教授につきて、概略の意見を述べることゝする。

本科教授を述ぶるに當り、たゞ教授の形式的段階などにのみ齷齪して、本科教授をば機械的に取扱ふことの愚を一言する。そも／＼教授を有效ならしめんには、方法上の末節に拘泥しては、到底其目的を達することができない。其目的のあるところを究めて、之を兒童の心情に堅くうち込むより、外に途はないと思ふ。而も教授者の精神が充分に流露して、兒童の感得するやう、熱誠を披瀝せねばならぬ。こは何れの教授にても、必要なる注意であるが、終學年の教授に於ては、最もこの趣旨を重んずべきである。上級兒童に對して、方法上の技巧を弄し、辯論的の雄辯を試み

上級兒童
に對する
修身教授

本科教授
の要點

たところ、兒童等はこれには感動しない。求知心の旺んなるこの時代の兒童等は、道德的事實其ものを尊重する、道理心の發達しつゝあるこの期の兒童は、道德上の原理其ものに歸向する。純潔なる感情、剛健なる意志、これ直接に彼等の迎合するところである。片々たる輕薄心に驅られたる熱誠なき教授は、如何に作り聲をなし、又其所作を氣取りたればとて、兒童の多くは、之を眞面目に請取らぬのである。終學年の教授者は、この點につきて反省一番せねばならぬ。

本科教授の要とするところは、提示の段に於て、訓言にせよ、事實の説明にせよ、兒童によく了解せしむることを主とすべきである。教授せんとする事項を兒童の心理に深刻すること極めて大切である。即ち彼等に思想を興ふることこれなり、而して與へたる思想につきては、之をよく判斷せしめ、以て善惡に關する觀念を明確にすることを務めねばならぬ。換言すれば、理解せしめ、反省せしめ、斷定せしめ、以て、兒童の思想を鍊り上げるのである。鍛鍊は實に、本科教授の生命にて、終學年の修身教授には、唯一の適法である。鍛鍊せられざる思想は、血となり肉となりて働くことができない。深く腦細胞に浸潤し、印刻して有事の場合に自然に道德の大道

に歸向することを得るは、即ち鍛錬せられたる思想の力である。其徳目多岐に互るとも、常に其歸趨を明確にし、思想の統一を圖り、新しき思想、新しき出來事に對して、惑はず、迷はず、執るべきの方途を案じ得るやうにならずば、本科教授の目的を達し得たりとはいへぬ。小學校の教育にて斯る域に導かんとするは、やゝ難事ならんかとも思はるゝのであるが、教授者の注意次第敢てムツカシキことでは無いと思ふ。即ち、終學年教授法に於て、なるべく開發式、反問式等を使用し、反覆練習して印象を強固ならしむるなど、取るべき方法であると思ふ。

道徳を教ふるには、道徳的情操を涵養せんことに務めねばならぬ。孝友和信等の徳を初めとして、博愛、義勇、奉公等の道に至るまで、之を知らしむるのみならず、兒童の心情に接觸せしめて、自發的の情動とならしめねばならぬ。感情の暖か味なき道徳は、吾人之を認むることはできぬ。善を愛好し、惡を嫌惡する心情あり、以て心安く體ゆたやかに、而も實行せんとの促進力が、心の底より湧いてくるのである。この感情陶冶をなさんには、先づ教授者の情操に於て確實なるものがなくては駄目である。この根源に於て涸渇するところあらんか、如何に感情的に持ちかけて

道徳的感
情

も教授は效を奏さぬ、初學年の兒童すらも作り聲や、虚勢にては、チャンと見抜く。終學年期の兒童は尙更である。されば教授者は、充分なる修養をなして、我が情操の熱腸を濺いで、之を兒童の肺腑に浸徹するやうに工夫せねばならぬ。浮氣の教授にては到底この域に達することは出来ぬ。

至情を以てして、至情を喚起し得ることは必然なれども、修身科教授の如きは、之を空論になし、坐談としてはならぬ。よく生徒の心理に適合し、精神に徹底し、其の心の奥底に於て適切微妙の感動を起し、以て實行せんとの發奮をなさしめんに、實際生活に接觸せしめねばならぬ。教訓したる事實は之を我父母に反省せしめ、兄弟と對照せしめ、若くは自己のある場合等に推考し、引き較べしめ、以て自律的の性情を喚起せしめねばならぬ。たい教材をよそ／＼しく取り扱ひ、斯かることがありしとか、書物に斯く記しありしとか等の如き、冷淡なる教授は排斥せねばならぬ。終學年期の兒童は何れも、旺盛なる情動を以て、教授を迎ふるものである。されば教授者たるものは、大に奮發して方法以外に於ける修養を積まねばならぬことと思ふ。

修身教授
と實際生
活と

情操の喚起に努め、之が扶植に骨折ると同時に、實行力の修練をさせねばならぬ。されば教授法の應用部面に於ては意志の發奮を促すことに務むべきである。即ち道德上の勇氣を養ふことである。善を選んで堅く之を執るが上に、正理を履み、正道を行はんがために、水火の中をも辭せざるの勇氣を養ふことである。之を養はんには實行の快を味はしめねばならぬ。且又實行の習慣をも附けねばならぬ。本科教授をば一場の訓戒談として聴き流さるやう注意して、兒童の實行談をも語らしむべく、父兄朋友等の實行談にてもよし、何れにせよ、實行の快味と實行するにつきての決心と勇氣とを養ふべきである。其こゝに到らざる教授は、本科教授の要旨に適合せざるものである。終學年の修身教授の如き、この點を等閑視してはならぬ。

之を要するに、終學年の修身教授は、善き日本人たらしめ、且又善き世界の人民たらしむることに、適合せしめねばならぬ。教材の連絡關係につきては、前學年とも照合すべきは、勿論、横に各教科とも對照すべく、而して之を教科用書に結著せしめ、尙よく活用すること、工夫を凝らさねばならぬ。而も之をなすには、教科書以外、兒童の讀み物にも注意して聯絡を圖るべく、更に新聞紙雜誌等の生きたる記事を参照して、之を教ふることを計らねばならぬ。學校に於ける修身上の教訓こそ、社會に處するには、是非共必要な規範なりとの如く、思念せしむるやう、いつも、實世間につきて語らねばならぬ。然して平素兒童に接觸して、善の獎勵をなし、以て教訓の透徹せんことを計るべきである。進みては兒童の相談相手となり、腹藏なく忠告もなし、聽許もなし、兒童等は衷心より教師に信頼するやう訓練すべきである。

第二 終學年の國語

一 教授の要旨

國語は思想交通の器械として必要なるのみならず、國民の品性を陶冶するため、缺くべからざるものである。彼の國民精神は、國語の習得によりて形造せらるゝことができる。されば修身科に次で、國民的精神統一の大任務を有してゐる。この科の教授を全うして國民的生活が滞りなくできることになる。即ち他人の言

語文字を理解して、其思想を悟り得べく、又自ら言語文字を運用して、思想を發表することができる、之をよく爲すことを得て、社會に處することができるのである。この點より見るも、終學年に於ける國語教授には、重大なる任務が負はせられて、あることが分る、何となれば、尋常五學年以上よりは、教材も豊富になり、且つ思想の交通につきても、其必要を認知し、居るが故、教授者は、他の學年に比し、一層の努力を要すべき事が明らかなるが故である。國語科につきての教則には左の規定がある。

國語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ、正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼ネテ智徳ヲ啓發スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ發音ヲ正シ、假名ノ讀ミ方書キ方綴リ方ヲ知ラシメ、漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及普通文ニ及ボシ、又言語ヲ練習セシムベシ

高等小學校ニ於テハ稍進ミタル程度ニ於テ日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方書キ方綴リ方ヲ授ケ、又言語ヲ練習セシムベシ
讀ミ方書キ方綴リ方ハ各其ノ主トスル所ニ依リ、教授時間ヲ區別スルコトヲ得ルモ、特ニ注意シテ相聯絡セシメンコトヲ要ス

他ノ教科目ヲ授クル際ニ於テモ常ニ言語ノ練習ニ注意シ、又文字ヲ書カシムルトキハ其字形字行ヲ正シクセシメンコトヲ要ス (小學校令施行規則第三條一、二、三、四、十項)

國定の小學校讀本につきて見るに、材料の選擇といひ、其排列工合といひ、各學年に對する適當なる教科書として推奨するに足るものである。若しそれ、完璧を要求すれば、際限はない。吾人はたゞこの教科用書によりて、教授の効果を發揮し、教則の要求する目的を達せなければならぬこと、信ずる。さて國語科に於ては讀み方、書き方、綴り方等に分たれてあるが、こは相俟ちて教授の目的を達せんことに努むべく、終學年の教授に於ては、すでに與へられたる教材、即ち言語、文字、文章を、充分に習得して、之によりて、教材以外の讀み物に對しても、理解し得らるやうに、堪能ならしめねばならぬ。又要旨には正確に思想を表彰するの能を養ひ、とあるが、終學年の教授に於ては、言語に於ける思想の表彰にせよ、文字によつての發表にせよ、何れも正確に表はすことができるやう練習しなければならぬ。智徳の啓發は、國語科に於ける副貳的の目的ではあるが、他の教科との聯絡にも注意し、且つ言語は

文學文章を教ふことに附随せしめて、其内容即ち意味をば充分に理解せしめ、以て讀書修養上の趣味の涵養をも務めねばならぬ。要するに尋常五學年以上の國語教授は、教則の指示せる要旨をばよく領得して、これを發揮せんことに努力せなければならぬ。

吾人は敢て從來の教授を批難せんとするものではないが、小學校の卒業生にして讀書力の未熟なるもの多く、特に小學校に於ける言語の練習不充分なりしが故か、衆人會合の席にては、何等發言し得ざるものを多く見た、甚だしきは、對個人との談話すら思ふやうになし得ざるものもある。又往々寒暑の撝挨もなし得ざるものもあり。『はがき』を書くこと能はざるもの、町村役場の納税通知書さへ讀めざるもの、或は新聞雜誌の讀み方さへ知らざるもの、誤字を書くもの、意味不明なることを書き綴るもの等、數へ擧ぐれば際限もない。こは吾人が狭き範圍に於ける小學校卒業生につきての觀察であるが、この種不成績の卒業生多きことは、否定すべからざる事實である。こは要するに、教授方法に於ける幾多の缺點の然らしめしものであることと思ふ。而も終學年教育に於ける注意周到ならざるものありて、こゝ

從來の國語教授

に及べるも、主要なる原因ならんと信するのである。吾人は更に繰り返へす、終學年の國語科教授は、よく其教授要旨のあるところを究め、之が發揮に努力すべしと。之に努むるが、即ち最善の國語科教授となり、價值ある効果を奏することと思ふ。

二 讀み方教授法

高學年の讀み方教授を如何にすべきかといふに、凡そ讀本教授には、二方式ありて、一は先づ思想を興へて、後に文字文章に及ぶもの他の一は、先づ文字文章の解し難き點のみを授け、而して後全體の意義を知らしめ、以て思想を得しむるものである。小學校の讀み方教授は、多くは前者に據るべきものにて、後者は教授事項の容易に理解し得べき場合等に用ふべく、即ち兒童の知識の進むに従ひて後者を多くし、以て獨立に讀書するの力を得しむべきである。されば終學年に於ては、何れの教授に依るべきかといふに、吾人は其何れをも採用して然るべきことと思ふ、即ち其教材の難易により兒童の讀書力の如何を究めて適當なる教授法をとるべしといひたひのである。然れども尋常五學年頃よりして、讀書力も進んでくる。従つて讀書の趣味も生ずる、換言すれば、文字文章を讀みて、それが如何なる意味なるかを知

終學年の讀み方教授

讀本教授
の順序

りて、そこに讀書の快感が生ずるのである。この故に高等科の終學年には多くの場合に於て後者によりて教授することの可なるを認むるものである。吾人は、こゝに終學年に通ずる讀本教授の順序につきて大體を述べ、更に教授の細節に入りて、二三の注意を述べやうと思ふ。第一が豫備である。こゝは既授の材料につきて復習をするのである。即ち前日の教材にて、今日の教材との聯絡ある部分の復習をなすので、讀み方、意義等を錬磨することを主とする。而して目的指示の段となる。この目的指示は、極めて明確にする。何頁何行何々までの記載事項にして、如何なる趣意につきて、讀習するのであるかをば指示するのである。而し時には、大體の指示に止めて、兒童をして先づ讀ましめ、其如何なることが記しありしかを會得せしむるの方法をとることもある。教授の段にては、一應兒童をして下調べをなさしめ、新出文字の摘書、語句の教授等をなす。之をなすには、幾多具體的實例を舉げて、其の内容の説明をなすのである。而して、讀み方の教授に、進行する。文章を讀むことと伴ひて、事實を了解せしむるやうに教へ行くのである。されど更に上級學年の教授にては、下調べなど省略して、單級教授、合級教授などは格別

高學年兒童
に對する
文字教授

として直ちに讀本につきて讀下せしめ、質問に應じて摘書をなし、或は語句の教授の進行を計るのである。斯くて練習の段となる。ここに於て讀み方の練習をなさしめ、内容の約説、或は敷衍をなさしめ、或は話し方の練習をなさしめ、或は語句の練習、文字の練習等をなさしむるのである。尙ほ必要により、文體につきての練習をもなすべきである。

以上は多くの場合に適用し得らるゝ讀本教授の順序であるが、其中高學年兒童に對しては、文字文章の教授に骨を折らねばならぬ國語教授に於ける文字文章の方面には左の如き要件がある。

い 書記せる符號を聲音の符號に翻譯せしむること。(即ち讀み方)

ろ 讀みたる文字、文章を正當に理會せしむること。(即ち解釋)

は 理會したる文字、文章の意義内容を談話せしむること。(即ち話し方)

に 既習の字句を應用して、新しき結構の文章を理會し得しむること。(即ち讀

書力の活用)

高學年兒童の教授にては、必ず、文字、文章の理會を、確實ならしむること、伴ひて、更

に之を談話し、或は書記して應用せしむるやうに鍛錬せしめねばならぬ。凡そ讀本は讀解することの力を與ふる一面には、綴り方の練習に連絡を計るべき必要がある。この故讀みたる文字文章を暗書せしむること(即ち書取)。或る語句文章は之を暗誦せしむること、讀みたる語句文章を改作せしむること、尙ほ文法を知らしむること等の努力を要するのである。教授進行中其必要に應じて、これを各種の方法に活用すべきである。

以下終學年讀本教授上注意すべき要頂を述べる。

(一) 讀み方につきての諸注意

讀み方は、成るべく兒童をして自ら讀み試みしめ、而して後に教師より範讀を與ふるやうにすべきである。教師が常に、先に範讀を與ふるは、兒童をして自發的練習をなさしむるの途でない。讀み方は、兒童誦讀力の程度によりて分かつときは、器械的讀み方、論理的讀み方、審美的讀み方等である。器械的讀み方は、濫濫なく正確に讀ましむる方法、論理的讀み方は、文章の斷續を明らかにして、意味を理解しつゝ、讀ましむる方法、審美的讀み方は、よく其の内容に従へる調子にて讀ましむる方法に

て、即ち思想感情を發揮するやうに讀む法である。而して小學校の下級の方に於ては、器械的讀み方にて満足すべく、五學年六學年等よりは、多く論理的讀み方によらしむべく、高等小學校にては、論理的、審美的の讀み方によらしむるがよい。されどここは大體の分け方にして、兒童の讀書力に應すべきは勿論、文體によりてもよく考慮して適當なる讀み方を使用すべきである。但し下級にても、教師の範讀は、常に論理的、審美的の讀み方に據るべきである。

文章の内容によりても、讀み方を異にする必要がある。これをば兒童に要求するは、或は無理かも知れぬが、上級兒童には特にこの心得をも承知せしめねばならぬ。即ち會話體の文もあり、豪壯なる漢字交り文もある、其内容には面白きもの、悲調を帯びしもの、或は奇異なるもの等いろいろある。これらをよく吟味して、適當なる讀み方をなすべきである。假へば左の文章の如きは、之を平凡なる讀み方を以てせば何の感じも起らざるべけれど、之をよく味ひて、其意を表現するが如き讀み方をなせば、如何にも其實況が想像せられて、幾多の感情の來往するを覺ゆるのである。

九月十四日、もすこゝ市の尖塔、圓閣、宮殿など、はるかかなたにそびゆるを望めり。なほれおん喜んで、壯麗なるもすこゝ市まさになが手に落ちんとすといふ。すでにその市に至れば、全市三十萬の民、去つて影を留めず、街路寂寥たり、全軍事の意外なるにおどろく、なほれおん本陣をくれむりん宮殿におき、全軍を分ちて市内の各所によらしむ。

精讀

讀み方に於ては、精讀の習慣を附けるやうにしたい。こは傑作、名句、格言、訓辭等、語句簡潔にして意味深長なる材料には主として之れを用ひ、他日法令達等を讀解する準備となさしむるのである。勿論略讀をもなさしめて、意味をば迅速に知らしむることも必要であるが、略讀は多く速讀に陥る弊を馴致する。西洋の諺に『速讀は惡讀の母なり』といふことがある。又文章は言語を書記したるものなれば、之を讀むは談話と同じき心得にて慎重に讀むべきである。濫りに高音にて經文を誦するが如くべからず、讀みをなすはよろしくない。高學年兒童等には、讀み方につきて如上の注意を以て教授すべきである。

讀み方教授に於ては、反覆練習を最大要件とする。下級學年に於ても、上級學年に

讀み方教授
練習と話し

於ても、讀み方の練習といふことは、極めて大切である。特に高學年兒童には、讀書の趣味を納得せしめ、更に文字を知り、文章に練熟せしめんがために、あらゆる方便を以て、反覆練習をなさしめたい。單に讀むことばかりでは、事實の復習もよし、書取もよし、朗讀もよし、文章の改作、要領の談話等をなさしむるもよい。されば、教式の變化に工夫して、この種教法を案すべきである。

(二) 話し方練習につきての注意

高學年の讀み方教授に於ては、話し方及び聴き方の教授にも一層の注意を拂はねばならぬ。吾が邦人は概して話し方に拙である。こは幼時より、練習を缺きしによるものが多い、されど人學當時より、文字教授をなすに骨折り、又習慣上文字あるものを尊重し、言語發表の巧妙なるものをば卑しむたることも其原因であることと思ふ。勿論兒童にとりては、記憶するに容易ならざる彼の漢字を習得するにつきて、多大の苦心と時日とを要することであるが、言語練習に注意さへしたならば、必ず話方も相應に熟達すること、信ずる。凡そ言語は思想發表の方便たるのみならず、これによつて思想を保存し、發達せしむることにもなる。言語と思想との

高學年教授
話し方

關係は極めて密接不離である、されば本科教授にては、文字文章等の讀解をなさしむると共に、内容上の發表をなさしむることに努むべく、終學年期の如きは、話し方に熟練せしめて、自己の思想をば整頓し、且つよく發表するの習慣を養はねばならぬ。

然れども、こゝに注意すべきことがある。話し方に熟練せしむるにしても、特に讀本直譯流の言語を以てしたり、或は書物に拘泥して、讀み方を幾分か話し風に變へたるやうな話し方ではよろしくない、又通常の話し方につきて、ますますよく練習するはよいことであるが、往々話し方練習として特別な演說句調、所謂學校言葉にて談話せしめ、兒童會、學藝會等にては、滔々この弊風を醸成して居る向がある。公衆の前にて、怯めず臆せず談話をするといふことは結構であるが、特別の辯舌法を習得せしむることは間違つてゐる。特に注意すべきは、話し方をば暗誦の如く取り扱ふことの缺點である。眞の話し方は、自分の思想を自らの言語にて發表することである。讀み方も覺え、意味も了解したといふ處で『本を見ないで今讀んだところを話して御覽』といふやうな教授が多い。兒童は讀本通り話さねばならぬと

話し方に
注意すべき

思ひて、恰も當て物でもするやうの氣にて器械的記憶を辿る。而して話し出すところは一向兒童の思想ではない、斯くの如きは大に間違つてゐる。上級兒童の教授にはこの弊習を矯めねばならぬ。

話し方練習につきては、姿勢、音聲、用語、殊に方言に就て、調節、語法等の諸點に注意せねばならぬ。尙ほ言語の修飾、身振等にも注意すべきである。下級兒童に對しては、多くの點に於て制限を加へ、思想發表を緊縮せしむるはよろしくない、自由自在に談話せしむる習慣に馴致すべく、終學年期にても、兒童個性に注意して、なるべく自由の發表を重んずべしと雖も、前記各項につきて指導することを怠つてはならぬ。尙ほ一言したいことは、話し方に於て、言語上の作法、殊に敬稱敬語の使用法につきて教授し、且つ練習せしむることである。同時に顔容、舉止、心の持ち方等に於ける諸種の作法と、話し方との結合を計ることである。心意安靜にして、容貌泰然、舉動閑雅、言語明快なるなどは望ましきことである。終學年の話し方教授はこの域に到達せしめたい。

終學年の
話し方の
著點

(三) 讀み方教授に於ける形式的陶冶

形式的陶冶の價値

終學年教授者の注意

本科の教授要旨にも記しありし如く、智徳の啓發をなすことが本科の副貳目的である。副貳目的とはいへ、この形式的陶冶、即ち精神的方面の陶冶は、國語科教授上必要なことにて、彼の國民の國民たる所以の精神と、本科の教授によつて養成せらるゝものにて、こは前に述べし通りである。殊に言語文字、文章を學習して書物に記しあることを讀み、其何事なるかを領會し得るは、無上の樂しみである。更に習得したる文字、文章等の力を應用して、未知未見の文章を讀み得るまでに進まなか、こは格別の妙味を覺える。この快樂、この妙味こそは、讀本教授を有效になすことによりて、期待し得らるゝものである。斯くして兒童は習得せる言語文字等を貴重するのみならず、進んでは良書を讀まんとする習慣をも作り得べく、尙ほ多くの場合に處して、修養を積まんとする發奮をなすものである。この域に導くことは、讀本教授者の大に務むべきところにて、精神的陶冶の基本と見なしてもよいのである。而も讀本教授の多くが、漸くに文字を知らしめ、讀み下し得らるる位の程度にまで進むのみにて、それ以上には進入しない、兒童の大部分は、折角習得したる文字や言語を厄介視してゐる。之を利用して大に讀書せんなどの奮發は少い。こ

讀本の内容

れ讀本教授の缺陷であつて、終學年の讀本教授者の如きは、大に反省せねばならぬこと、信するのである。

讀本の内容には修身、地理、歴史、理科等の教科あり、又處世上、社交上必要な材料あり、或は文學的の趣味に關する材料もある。これは言語、文字、文章を理解すると共に、内容上に於て多くの實質を得て、精神的の陶冶をなすことができる。讀本教授は深く實質方面に立ち入りて、爲めに其本領を没却するが如きことあつてはならぬのであるが、言語文字にせよ、文章にせよ、生動して興味を感ずるは、即ちそれが含有し、表現する思想感情意志其物を感得せるに因由するものである。されば終學年の教授に於ては、特にこの點にも注意を拂はねばならぬ、たいそれ、如何にも讀本教授らしく取扱ひて、文字文章の深究等にのみ拘泥するは、策の得たるものではない。

(四) 既授の言語文字、文章等の活用

これ高學年教授上極めて大切なることである。何れの學年何れの教科に於ても、教授したる事項を練習し應用せしむることは必要であるが、終學年の國語教授殊

に讀方に於ける練習應用は、是非共注意して爲さねばならぬ大切なことである。すべて事實的の教材に關する應用の如きは、二三の例にて足るものであるけれども、言語、文字、文章等につきては、其使用せらるゝ場合甚だ多くして、且つ自分の考へ次第にても餘程應用することは出来る。其應用のすべてを盡すことは出来ないとしても、既得の言語、文字等は、兒童の經驗界に應じて、多くの實例に當らしむべきである。之がために教授者は豫め工夫して置かねばならぬ、教室内にて咄嗟の間に適例を認むることなどは出来ぬ。よし、熟練家にしても無考慮にては、よい教授は出来ない。されば細目及教案作製の時に工夫するは勿論のこと、平常注意してこの種實際應用例の蒐集をなすべきである。

さて既授の言語、文字等の活用法につきて如何にすべきかといふに、教授中、練習の段にて教師が應用問題を提出して書取をなさしめ、簡單なる文章を綴らしめてもよし、或は兒童をして適用例を發見せしめてもよい、或は又宿題として課してもよい。而し讀方科の應用をばすぐ其教授時間中になすべきものとのみ思ふは無理なることである。教授をば済まして、通るだけのものとすれば、一時間中に澤山の

應用問題を課して、結末を附くればそれでよいであらうが、教授したることは兒童の知識とならしめ、永久活用のできるものとせねばならぬ、こゝに到達せしめんに、平素不斷の注意をとり、永久に亘りて教授せんとするの覺悟をもたねばならぬ。されば教師は新聞紙雜誌等に注目して、適切なる應用例を蒐むべきは勿論、兒童間の交際、或は其土地に於ける實際生活中より、實例をとり、斷えざる指導をなさんことを心がくべきである。

(五) 文學的趣味の鼓吹

國定小學讀本は、諸種の方面に於て教育的の注意を拂はれてある、中にも文學的の趣味を涵養するに足る材料も澤山ある。所謂文學的の趣味とは、文章の妙を味ははしめ、之を好愛するの思想及び感情を指すので、文章には之を讀んで意義を解すれば、足るものと、尙ほ之を讀みもて行く内に、言ひ知れぬ感にうたれ、讀み了りたる後、とても餘音嫋々たるものがある。又之を讀むにしても、語調の流麗なるものと、否らざるものとある。國定教科書中、韻文の如きは、即ち文章として語調の誦しよきものにて、用字用語ともに一種の美を感得せしむるものあり、其他散文にても風

景を叙したるもの、戦記或は童話的のものは文章の上に特種の洗練を加へたるものあり、又之を加へざれば、其體を得ざるものもある。特に我が國民性の涵養の如きは、雄大なる思想感情を詠じたる詩歌、或は莊儼なる文章によりて、之が目的を達し得らるゝのである。讀書の要は、文字文章を知れば足るとはいへども、我國語讀本によりては、我固有の文學的思想に接觸せしめ、之を涵養し、更に之を鼓吹する必要がある。所謂文學的趣味の養成である。若しこの種の養成をなすことを得ざらんか、國語教授の價値は、其一半を減却したるものと言つてもよい。而も文學的趣味の養成は、終學年期に於て、之が目的を達することに努むべきである。とはいへ、こは教授者の手腕と注意とに俟たねばならぬ。教授者にして文學上の趣味なくんば、材料取扱ひ上之を活用することができぬ。殊に文學的の教材にても、之を死物的に取扱ひ、譯の分らぬものとして教へて仕舞ふ、兒童には一向に趣味は起らぬ。況んや文學趣味の應用などは望むことができない、斯の如くんば終學年教授としての價値がない。

文學と國民性の發揮

凡そ偉大なる國民は、其國民性を發揮することに務めたる雄麗なる文學によりて

養成することができるのである。我が國民文學は、古へよりして相當に發達してきてゐる。されど、天地自然の風景をば、文學化したるものはあるが、雄大なる思想、豪壯なる感情、堅確なる意志をば、文學化したる大文章は無い、従つて國民文學としても、雄偉なるものはない。纖麗優艶なるものはあるが、豪宕にして濶大なる文學的産物が無い。而も和歌の中には、其思想感情の稍雄壯なるものもないではないが、之を兒童に教授するには、適當なるものが少い。吾人は我が國語讀本によりて、上級兒童に對する文學的趣味を養ひたい、更に文學的洗禮よりして、雄大なる國民を養成したいと思ふ。之が爲めには、他日に於ける國定讀本の大成と、教授者の研究とに俟たねばならぬ。

(六) 終學年の讀み方教授に對する特殊の努力

終學年兒童に對する讀書力を附與せんには、教授者たるものは、特別の手續をなすべきである。そは教授に附帶する諸種の注意と、施設とをなすことにて、之につきは、實際家はそれ／＼苦心して研究せられ居ること、信するのである。今左に二三の注意すべき點を述べやうと思ふ。

い漢字表等の調製 既習の漢字を一目瞭然たる表に調製して、之を見易き場所に揭示して復習の用に供せしめ、或は教授中に之を掲出して練習せしめ、或は児童をして之を寫し取らしめて、各自が自習用になさしむるなどの方法をとるのである。之をなすには、毎學年習得せる漢字表にてもよし、或は形體上誤り易き若くは讀方の誤り易き漢字表等もよし、或は漢字の扁旁冠構等を表解にせるものもよし、或は比較すべき文字即ち類似文字の表もよし、或は漢字、運筆前後表、略字表、其他訛言、方言等の矯正表もよし。この種のものを調製して、上級學年児童には特に練習を多方面になすのである。注意深き小學校にては、すでに色々と著手し實行してゐる。

ろ辭書の使用法 高學年児童には、辭書を使用せしめて、自習するの習慣を附くことも必要である。之がためには、漢字につきて扁旁の名稱教授をなし置くがよい。こは尋常二學年頃より教授すべく、尋常五學年よりは、同じく扁旁の教授及劃の數へ方を教授し、六學年より引き方を教へ、且家庭などにては、實際使用せしむるもよからう。又學校にても、教師指導の下にて使用せしむべく、高等小學校に進

みては、適當なる自習時間に於て、教師指導の下に使用せしむべく、家庭にて使用せしむることは勿論である。然し辭書使用につきて注意すべきことがある、それは辭書のみを便りとなして、記憶することをせず、又徒らに繁雜なる手数をなして、時間を空費せぬやうに仕向くことである。字書使用の如きは、同一學年児童にても、其能力によりて、之を能くするものと、或は之に堪へざるものがある。同様に之を強ふることの出來ぬこともある。尙ほ坊間にて發賣する讀本字解様のものにより、之のみ便りとして自習するものもあるが、これらは適當に取り締らねばならぬ。たゞ一知半解に陥りて、其眞意義を得ざるが如きものは、斯る字解様の書物などにのみ依る児童に多い。斯くて、學力は一向に進まない、従つて活用は少しも出來ない、注意すべきことである。

は語法文法等の教授 この種の教授には、なるべく初めより注意するがよい。敢て最初より語法文法上の名目を授けよとの趣旨ではない。たゞ實例を豊富にして歸納的の教授をなさんことに心がくべきである。而も之を無味乾燥に取り扱つてはならぬ。而して之が取り扱ひにつきては、日常の談話に適例を認めて、書

物上の應用たらしめ、且文法にては、綴り方教授との關係に注意し、誤文の訂正につき練習せしむるもよい、高等科に至つては、邦文に最も大切なる中止法に重きを置き、又主語を省きたる文の讀解に慣れしめ、且つ呼應及び時を違へざるなどの注意を與へて指導するのである。之をなさんには、教科書と聯絡せしめて、毎學年に分ちて適當なる指導細目を作り置き、之と、各教科に於ける説明及び作文等との聯絡を圖りて教授するのである。要は各教師に於て、この種の知識を豊富になし置きて、以て教授を全うせんことを期すべきである。

に筆記帳類の整頓と利用 上級學年兒童には、讀本教授に附帶して、各種の筆記帳を要すれども、兒童の多くは、之が整理を亂雜にして、後日に至りては、自分にすら備忘の用にならぬものがある。すべて筆記帳の整理は、何れの教科にても必要であるが、讀方科に於ける上級學年兒童にとりては、讀方に關する筆記帳の如きは、よりよく整理なさしめ、之を活用することに慣れしめねばならぬ。其整理といふは、新出文字なり、或は其他の解釋、文法、模範文の記載等を正確になさしめ、振り假名の如きもよく一定の形式にて整理せしむる方法をさすのである。随分兒童中には

上級學年
の筆記帳
の整理

筆記帳に
ついては
注意する
教師

この筆記をば等閑に附するもの、或は筆記しても、他教科の筆記材料と混同するもの、或は鉛筆、黒汁にて塗抹して文字の痕跡すら分らぬものもある。其他は餘分のイタヅラ書きをなせるもの、或は折角筆記したるものを破棄せるものなどがある。不注意なる教師は、この種の不成績の兒童に對して、矯正的指導をとらないのである。されば、兒童は上級學年に進みたりとも、讀み方の成績は進歩せぬ、其筆記帳は教授を受くる節に、たゞ々々筆記せるものに過ぎずして、後日に至り教師を離れては何等の指導の役に立たぬのである。この故に兒童の學力は一向に精鍊さるゝことがない、従つて活用などは思ひも寄らぬことである。されば吾人は、上級學年擔任者に向つて、筆記帳整理と利用法とにつきて細心なる工夫あらんことを切望する。終學年兒童に對しては、是非共、教授法に附帶する、教授上の注意を、密にする必要がある。一時間の教授は、兒童を他日自ら數十時間活動するの準備と力とを與ふるの覺悟を以て研究せねばならぬ。

終學年の讀み方教授に對しては、まだくゝいろくゝの注意すべき點もあるが、之を略することゝして、こゝに擲筆する。然し最後に一言せんとすることがある。そ

は或は老婆心に過ぐるの恐れあれども、教授者の學力問題である。何れの教科にても、學力の豊富なると、活用の敏捷なることは望まじきことであるが、分けても國語科の如きは、基本的の教科にて、教授者の學力問題が、直接に、教授の奏效問題と關係するものである。貧弱なる讀書力を有して、教壇上に立つ心細さよ、教材研究に到らざる點ありて、教場に臨む其元氣無き求知心満々たる兒童は、口には言ひ出さないが、師の學力の覺束なき説明振りには、一方ならぬ不満を抱くのである。教師はどこまでも修養せねばならぬ。

三 綴り方教授

綴り方教授は、すべての學年を通じて其効果が擧らぬといふ批難が多い。特に高級學年の兒童にして、自己の思想を發表することに拙劣なるもの多く、教授者は相當に骨折つてゐるが、結果が、マツイといふことである。多くの教授者につきて本科教授に關する感想を聴くに、何れもムヅかしいといふ、従つて成績が擧らぬといふ。之は如何なる故であるか、吾人は本科教授法を述ぶるに當りて、先づ上級兒童綴り方の不成績なる原因につきて卑見を述べる。

(一) 高學年綴り方不成績の原因

之が原因にはいろいろある、先づ基礎的方面より述べんに、讀本教授の不完全なりしも有力なる原因である。そはたゞに、當該學年に於ける該本教授のみならず、以前よりの讀本教授が充分ならざりし結果である。多くの教師は讀本中の文字文句文章等を理解せしめんとして、隨分其方法に苦心する、されどもたゞ如何なる事柄が記載しあるかをのみ、理解せしめんことに務めて、其文句文章の構造、換言すれば、順序、内容、段落、起結、妙所等につきて指導が足りない。單に斯くのごときことが記しありと教ふるよりも、更に進みて一篇の文章を解剖的に取り扱ひ、以て作者か發達の巧拙までも批評するやうにしたい。すべての教材に對してしかあれと要求するのではないが、高學年の教授に於ては斯の如き取扱ひをせねばならぬ。讀み方教授に於ては、模範とすべき文章をば、讀誦するの習慣を、附けねばならぬ。朗々と高聲に讀誦することは、記憶の上に大なる効果がある。尙ほ、この種朗讀をば、心耳を澄まして、聽問することである。高學年の讀み方教授に於ては、朗讀にせよ、説話にせよ、聽問する風習を養ふがよい。これ極めて大切なる注意である。そ

れから談話であるが、教師は兒童に對するに、なるべく思想の順序を正して、發表するの習慣を與ふるがよい。

次は各科教授に於ける不注意なることである。綴り方をば讀本にのみ聯絡せしめんとするは、未だ一を知りて其他を知らざるものである。修身、地理、歴史、理科、唱歌、書き方等の教授に於ても、文字、文章の教授を確實にし、或は説話、證明等の言語を明瞭になし、事實の理解と共に、文章の上、に注意せしむるのである。即ち他教科にても、讀書力の附與に力を注ぐことである。高學年の教授はこゝに注意せねばならぬ。要するに上級に進むに従ひて、讀書の力を要すること大となり、同時に發表(文章に、言語に)することも必要に迫られてくることを忘れてはならぬ。

教授法方面に於ても、注意の足らぬ點が多々ある。學年全般に通じての注意であるが、綴り方の教授、細目を慎重に作り置くべしとのことである。之につきては、各學校共大綱を確立し、全學年を通じて、系統正しく、口語文、普通文、日用文等の形式を了解せしむるに足る細目を作り、且つ之が練習問題の一部分までも、吟味し置く程に注意して欲しい。而して之が作製には、讀本を主とし、他教科との關係及び當該

學年兒童の思想界を調査して、以て細目を案出すべく、而して年々教授の結果に省みて、加除訂正するやうにする。斯くて之を基とし、發表の形式につき、大體を教ふべく、練習もなさしむべく、また自作の獎勵等もなすべきである。

綴り方の題目選定法である。こはすでに相當の研究を積み、其の依るべき所は、ほ明確となりかけてはゐるが、本科の取題上、我が教育界は未だ正當なる斷案を與へざるかの憾みがある。讀本を基礎とすべしとか、或は他教科の材料より取題せよとか、或は兒童の觀念界にあるものより、題目を選定すべしとかいふものゝ、こは理論としては結構であるが、兒童の實際に立ち入りて、綴らんとするの動機方面より、攻究すれば、如何なるものであらう、余は此點につきて大に疑ふてゐる、勿論讀本等の材料を主とすべしとはいへ、更に兒童にとりて必要なる問題、趣味ある題目、換言すれば發表せんとする意志、勃々たる底の題目選定こそ、最も緊急なる研究ではあるまいか、其之上級學年につきて研究せんか、彼等は實際生活の諸問題には、漸く興味をもちつゝある、されば題目の選定の如きは、兒童にとりて自律的に、而も實際生活に接觸したるものがよいと思ふ、假令ば我家のとを書けとか、我村の様子とか、我

模範文を
充分に與
へよ

が親類へ送るべき手紙とか、我が學校の有様とか、農業の現況、市場の目撃談、或は昨日自分の爲した事とか、何れも自己の思想感情中にあることにて、空漠ならざる事の記載である。時に其題目は一定せずともよい、はがきなり封書なりにて各兒童が必要上親戚、知人、商店等への通信なり、照會なりを認めしめ、之を實際投函してそれの用を辨じ得るが如き教授もよい。要するに、本科をして、一層實際的ならしむることである。たゞ面白半分に綴らしむるが如き、或は多く空想を交へて綴らしむるが如きは禁物である、教授者たるもの取題につきて研究を望む。次は、模範文の指示を充分にしたいといふことである。所謂模範文とは讀本中に最も兒童に適せる文、若くは教師自作して、指示せる文章にして、兒童をして大體に於て之を範として依據せしむるに足るものである、而して模範文につきては、其結構妙所要點等を知らしめ、兒童をして暗誦自在ならしめ、且又自由に他に適用せしめねばならぬ。上級學年に於ては、模範文の選擇を慎重にして之を課すべく、而も自由に朗讀し、暗誦することを得しめ、且つ適用することを許し、彼等に自作を奨むるのである。

思想整理

思想の發表方法を論理的に教ふることが必要である。上級兒童には自作せしむることが必要であるが、之をなさしむるにつけても、初めは思想整理につきて指導するのである。思想整理はたゞ教師が之を教ふるだけにてはよくない、所謂思想整理とは、發表の先後順序、材料の取捨等に關する思辨を加ふることである。兒童をして文題の趣旨を知らしめ、同時に記述すべき事柄につきて推究せしむることである。思想整理といふことが、往々教授者の注入的教授として行はるゝのみならずは遺憾の極みである。其題材とすべきものにつきて自發的に推考せしむることである。兒童は我觀念界にあることにても、之を適當に案排することに慣れてゐない、この故に發表すべき材料、及方法を論理的に指導するのである。次に述べんとするは、作文上、推敲せしむることを多くすべしとの主意である。凡そ文章を綴らんには、多少の努力をせずば所思を貫徹することができぬ、又發表の形式とても不完全たるを免れぬものである、今の綴り方教授の多くは、讀本中の材料、而も教授して間のなき生暖き題目を與へて、囓んで含ましむるが如き、入念の思想整理、否思想注入をなし、兒童には鸚鵡返しに復演せしめ、さて之にて作文せよと命令す

文章の推
敲

る、児童等は何等思索する必要はない、或は讀本通り書かんとし、或は教師口寫しのまゝに綴らんとして、恰も判じ物か當て物にでもする氣にて、左顧右眄しつゝ作文する。彼等は既授の文句を應用せんともしない、従つて、ウ、マ、ク、發表せんとの奮發もない、何れも同様の形式を繰り返して、死せる文を書いてゐる、甚だしきものは他人の文を盗見しては書いたり、或は書物の文をば、器械的記憶にて辿りては、譯の分らぬものを書いて出す、作文力は少しも進歩しないこととなる。要するに上級學年にては推敲せしむることに重きを置きたい、而しこゝに斷つて置くが、推敲して綴らしむべしとはいへ、作文に手間取らしめよとの意ではない、なるべく熟練せしめて達意の文を簡潔に早く綴り得るやうに導きたいと思ふ。

右の注意の外、自作文獎勵といひ、添削方法の系統的にして、而も力あること等何れも本科教授上大切なことである。上級學年には其學年相應、この種の研究をなすべきである、今こゝに委しく述ぶることを略す。

尙ほ附帶注意として二三を述ぶる、綴り方成績を良好ならしめんには、上級學年児童には教科書以外の讀み物を獎勵することである。新聞紙、少年雜誌、及少年書類

附帶注意
の二三

校外教育
と綴り方
教授

の中にて、清新なる材料のものを讀ましむべく殊に同級児童、及上級児童の文章、小學児童程度の雜誌に掲載せられたるもの等を讀ましめ、之を批評せしむるなど必要のことである。其他學校にては、揭示、教育をなし、平易なる揭示文を以てして、児童に讀ましむることも必要である。

校外教育を利用することも、綴り方教授に於て、攻究すべきことである。児童を引率して郊外散歩をなす際、若くは名所古蹟を訪ひたるときには觀察すべき點を指導して、児童の思藻を富麗ならしむるやう教ふることである。同時に教師は模範的の文を作りて、其一部分を示すも可、讀本中の文を引用するも可、古人の作を示すも可、了解し得らるゝ限り、時に其實境に臨み、實況に接して見たる有りのまゝを語らしむるも可、觀察事項を筆記せしむるなども結構、若し市中通行の時、若くは旅行などの時には、各商家の揭示廣告等に注意せしめ、務めて讀解の力を養ふことも必要である。

家庭に依囑して親戚への通信、返事、其他家事用の文書をば取扱はしむるやうにすること、一の注意である。又時々他よりの手紙を掲出したり、或は讀み聞かすも

家庭との
聯絡

よい、學校、家庭と相俟ちて、兒童をば筆無性たらしめざるや、訓練するがよい。綴り方教授をば實用的にせよとのことは前にも述べたのであるが、こは上級兒童には大に必要である。されば彼の學校、郵便の施設をなすもよい、家庭に於ける用向の所辨、又兒童等其日々自己に關する出來事の記帳をなさしむるなどもとるべき注意の一つである。

以上綴り方教授に於て等閑に附せられたる事である、之に注意すれば必ず成績は見事なる好果を奏すること、信ずる、上級の綴り方教授の如きは、是非共前記各項に準據せねばならぬ。

(二) 綴り方教授の順序及び注意

綴り方には文體に各種類あり、其教授方法にも數多ある。即ち文體を内容上より見れば、敘事文、記事文、説明文、日用文等にて、又形式上より文體を分ければ、口語文と文語文との二つにて、更に口語文中に敬體の普通文と、日用文とあり、常體のものもある。文語文中には、普通文と日用文(候文)とある。教授方法につきていはんに、内容指導法あり、形式指導法(範作法)あり、自作法、修辭法等いろ／＼ある。而して之を

綴り方の
文體

自作法に
於ける教
授順序

各學年につきて考究するに、教授方法に幾種類あるか數へられぬほどある。されば、今こゝに特に教授の順序方法をば明記することはできぬが、上級學年に、比較的

多く課すべき自作法の場合につきて、教授順序を述べる。

自作法によりて綴らしむるには、其以前に於て模範文など示して、適當に指導して置てからのことである。勿論題目によりては、一概に然く決することは出來ない場合もある、さて自作法にては、目的の指示をする、而して兒童の心意をそれに集中せしめんことを期し、必要なる問答もなすべく、且つ慎重に考へ、ウ、マ、ク、綴るべしと奨勵する、而して文題は教師適當に命名して出すもよし、兒童をして任意に選ばしむるもよい、斯くて發表に必要なる注意を與へて記述せしむるのである、記述即發表中には、成るべく自由に任すこととし、兒童の質問には適宜應ずるがよい、記述後は大に教師の努力を要するので、批評訂正をする、其批評訂正には、兒童相互になさしむることもあり、自己批評もなさしめてよい、吾人は之が批正法の詳細は他の教授法書に譲りて述べぬことにする、而し、上級學年、兒童に對する、批正は、兒童が思想、排列の苦心如何に注意して、やる、更に語句の斷續、文の段落、照應等に注意し、尙ほ文

上級學年
の綴り方
につきて
注意

章として首尾一貫あるや否や、事理貫通せるや否やの吟味である。この種の諸點に、つきては批評にせよ、教授にせよ、系統的に指導するがよい。たゞ何等の方針なしに批評するは、徒らに手数をなすのみにて、格別の効果がないのである。一歩進みては、文の修飾に注意せしむるのである。即ち句の長短、音調の耳觸りに留意して、審美的に作文せしむることに努力するのである。敢てどこまでもこの種の注意をなせとの注文ではないが、高等小學程度の綴り方は、こゝに著眼せねばならぬ。綴り方教授につきて注意すべき點を述べる。從來の教授法は本科をば至難なりとの前提の下に、ますく、面倒臭く教へたものである。讀本の文體によるべしとか、思想整理をなすべしとか、既授の文字文句にて作らしむべしとか、又は新に文字を教ふるなかれとか、新に思想を興へてはならぬとか、様々に窮屈なる教授をしたのである。教師の多くが文章に對する確たる知識と信念となくして、たゞ兒童の綴り方にのみ向つて、斯くの如く戦々兢兢たる態度にて、本科を取り扱つたのである。さればにや兒童の心意作用をば極めて狹隘に劃定し、思想活動を制限し、發表方法をば緊縛して、恰も腫れ物に障るが如く、或は危險物に接觸せるが如くにして、作文

自作の奨励

せしめたのである。成績の擧がらぬのも無理はない。然らば如何にせば可なるかといふに、余は彼等をして、自由に作らしむるやう初めより馴致したいと思ふ。上級生に對して文字數の制限をしたり、思想の限定をなすは間違つてゐると思ふ。而も自由に作らしめて、又訂正批評を寛大にするのである。寛大に訂正して置いて、徐々系統的に指導するのである。斯くて彼等を鼓舞して發表せんとするの趣味を養ひ、以て多く自作せしむるのである。自作を多くして、漸次自得の位置に到達せしむるのである。

文題選擇

次には文題を適切に選べといふことである。このことにつきては、前にも少しく述べて置たが、更に一言したい。鶴岡重治氏の著されたる教授訓練の誤謬開發社發行といふ書物に、左の警語がある。これ吾人の言はんとするところであつて、大に反省せねばならぬことである。

寺小屋教授時代に行はれた作文の教授法は、鮭を送る文……鮭到來に任せ三尾御覽に入れ候云々、提灯を返す文……昨夜は深更まで御邪魔申上甚以御迷惑之段云々、某山に遊ぶの記……此日天氣晴朗一點の浮雲なし即ち一瓢を携へて友

と某山に遊ぶ、酒三行吟じて曰く云々……著者附説この種題目中々多し、金子借用を申込む文、新茶を贈る文、友人の怠惰を戒むる文、轉宅に手傳を頼む文、出産を知らずる文等ある今もこの種の文題を提出せる教員もある、高が知れた十二三歳の子供に、二三圓の贈物をさせ、朝寝夜ふかしを嚴禁すべき時代に、深更まで夜遊をした手紙、泥んや一瓢を携へ酒三行するに至りては、言語道斷、殆んど啞然たらざるを得ざるなり、然れども此の如き寺小屋式教授法を猶二十世紀の今日に於て目撃せざることを得ざるに至つては、殆んど言ふ所を知らざる次第である、東京の某小學女生徒に、秋の庭と云ふ文題にて自作させてゐるのを見たが、黒板の真中には、只文題が無難作に掲げられた計りで、神經顔をした中年の女先生が、ボンヤリ立つて居る、生徒の作つて居る處を見るに、

蟬の聲もいつしかをさまりて四方の山々赤くなりぬ、吾が庭の松の根太き落葉が下に、松茸、しめぢなど拾ふも面白し……

何んと恐れ入りたる次第ではないか、人口二百萬、マッチ箱を並べた様に人家が重り合つて、土一升、金一升の大都會、望遠鏡を用ひたつて、箱根山の木の葉も見え

ぬ様な處にありて、蟬の聲はまだしもとして、四方の山々は赤くなるとは餘りひどい、泥んや松の根太き落葉の下などは、何處を尋ねてか見出すであらう、椎茸の名位ならば誰かに聞いたことはないとも限らぬが、松茸しめぢ、如何にして知つて居るであらうか、餘りの不審に堪へぬから、鳥渡綴方清書帳を借りて見たら一番おしまひに、「秋の野山」と云ふ題で、枕の草子か伊勢物語、一條朝の才媛其まゝの模範文があつた、慥か高等二年であつたと思ふ、秋の庭は其應用であつた。「下略」如何にも、コンナ調子で作文させられては、兒童の困却するも無理はない、成績の擧がらぬのも道理至極、義務教育を終つても受取一枚書けぬものがあるのも當然當然。

綴り方をして實地に應用せしむることにつきては、これも亦前に述べた、更に之を具體的に記さんに、上級兒童には當番を定めて、學級日誌を書かしむること、其他學校園日誌、栽培日誌、養鶏日誌等の記録を掌らしむることである。夏期冬期の休業には、休業中の日誌を書かしむるもよい、尙ほ能ふべくんば、上級生には毎日の日誌を書かしむることも必要である、諸教科教授の際筆記を多くするも一法、筆記せし

個人教授

め或は筆答せしむるには他の方面にて注意すべき點多々ありである。又受取證の認め方諸届け書類の形式等を教へ、必要上練習せしむるなどもよい。個人教授を有効に爲すこと極めて必要に思はるゝ、前述べし如く、作文は兒童をして自由の發表をなさしむることに重きを措きて、其作成したるものに對する個人指導を親切に丁寧、且つ綿密になすべきである。即ち上級兒童などは、簿上添削である、各兒童の作文力が毎々の作に表はるゝものなれば、缺點も分るし、長所も分る、それらをば精細に注意して矯正し發揮するのである。彼等の學力程度にて了解し得らるゝ訂正に止め、而も其訂正につきては、後に各自が成程と合點するやうでなくば効果が無い。訂正されたる文は清書帳に記さしめ、こは自宅作業にして課すを可とす、時々朗讀せしむるやうにする、要するに、教師は手数を煩とせず、根氣よく個人指導をするのである。兒童に向つて完全なる作を要求せずして、彼等の作りたるものが趣意明らかならばそれでよしとして、大體の訂正に止むるがよい、敢て兒童等を擁して一様式に綴らしめんとし、或は教師自身の學力に照らして満足せる點にまで牽引せんとするは誤りである。

書き方の目的

四 書き方教授法

書き方の目的は筆蹟をして正確に、美麗に、且つ迅速ならしむるのである、字書及び運筆を誤らずして、正當に書けば、文字は必ず正確となるべく、字形及び字行を正しくして、筆力暢達するときは、文字は美麗に書ける、而もこの正確と美麗とを失はずして、能く迅速に書き得るやうになることは、本科に於て期待するところであるが、こは十分に練習を積んでからのことにて、始めより之を望むことはできない。然し、終學年期の兒童には、正確と美麗とを要求して書かしむべく、漸く進みては、迅速に書くことを獎勵して、之が練習をなさしむるのである。

終學年兒童に對する書き方教授として、特に一定の形式を述べることとはできないが、こゝに二三の注意を述べやうと思ふ、教授の段に於て、文字の読み方、意義の説明をなすは勿論のこと、文字の結構、運筆の順序方法につきて教へるのである。されば之が教授に必要な文字に限るので、くたくしく説明するは不要である、尋常五學年頃より、連筆教授の折りに、楷書と行書との比較もなすべく、高等科に進みては、楷書と行書との比較をなし、尙ほ楷書と草書との比較もなすがよい、筆法筆意に

書き方教授の注意

つきても、上級學年にては教授するがよい、而も斷片的の筆法教授では効果が無い、新教授毎に前に説明せし筆法との關係に注意せしめて、教授を進むるやうにすべきである。練習の際には細心にして、叮嚀なる書き方に馴致すべく、粗末に書き散らすやうの悪習慣は禁物である、而しこの注意をなしつゝ、速書するの練習をせねばならぬ、尙ほ手本を離れて暗書することを奨勵すべきである。從來の教授にては暗書を等閑視したものである、兒童は手本を離れては何も書けぬ、手本を見て、ただ恐るゝ書くだけであつた、されば手本以外の材料を書かしむることは一向にない、兒童は本科に置いて何等活用をなし得ないのである、凡そ本科の如きは實用上比較的他に優りて價值のある教科である、勿論綴り方、讀み方及び其他の教科と併行するのであるが、書記することは何れの家庭にても毎日必用のことである、本科をよく利用すれば、家庭の役に立つことは大なるものがある。然るにたゞ手本にある大字のみを習はしめて、手本以外の材料を書かしめない、暗書もさせない、早くも書かしめない、それ故兒童は本科に對する受動的の興味を有するばかりにて、徒らに清書をなし、評點評語の他より優れるを唯一の樂みするに過ぎない。終學年の

本科の活

終學年の

習字教授

の習字教授は、實用的の練習に著眼すべく、其練習にしてみたい、濫りに手本を眞似るのみにてはよくない、理解的書き方、即ち何故に此くの如く書くべきか、何故に然か書かざるべからざるかを考へつゝ、練習するやうに教授すべきである。されば手本につきて、其美點妙所を味はしむべく、又屢々善書を直觀せしめ、悪書の批評をもなきしめ、自ら書きたるものに就きて、其正否の判斷がつく迄に學力を鍊磨せねばならぬ。

訂正法

訂正法につきて更に特記する必要はないが、手本を標準として、詳かに比較照驗して其及ばざる點を覺らしむるやうにすべく、彼の教師が自分流儀の筆法にて、手本とは没交渉なる範書を示して、顧みざるものあれども、こは注意せねばならぬ。然し、餘り窮屈に筆勢を緊縛して、強制的に手本の範鑄に入れやうとするは、考へものである。どこまでも手本は手本とすべく、而も兒童等の筆力につきては、暢達するところまで自在に暢ぶるやうに導くべきである。又訂正に際して本體なきまでに訂正を密にすること、朱圈を安賣すること、一度訂正し與へたる文字を、再々訂正するなどは、慎まねばならぬことである。

細字練習

細字練習に重きを描きて、筆寫に習熟せしめ、敏速に且つ美麗に書かしむることを主とすべし、これがためには、字と字、行と行との關係に注意し、平素の教授に於て指導を怠らぬやうにすべきである。斯くして手紙の認め方、封筒の書き方等、日常必須の書式を練習せしめねばならぬ、細字練習をなさしむる際、上級生に下敷紙を用ひしむるものあれども、最初一二度はよからうが、要領を悟りたらば、下敷などは用ひしめてはならぬ。

清書

清書をなさしむるとは、何れの學年にも必要である、こは練習の結果を纏め、教授に變化を興へ、成績の進歩を驗し、批評訂正の機會を得るためになさしむるものにて、一週一回位はせひとも課したい。上級學年兒童などは、いつも清書をなす考へにて、習字せしむべしと雖も、特にこの清書をばなさしむるがよい、この際書き換へをなすはよろしくない、之は嚴禁すべく、又、暗書をも勵行したい、書き換へせず、手本にも據らずして、美事に暗書なし得らるゝやうに馴致するは、高學年教授上望まじきことである。

第三 終學年の算術科

一 教授の要旨

本科の目的として、小學校教則第四條第一項に、

算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ生活上必須ナル知識ヲ興へ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

計算習熟

とある。計算といふことは、事物の最も簡單なる關係に於ても、既に必要なことである、況んや日常生活上には、缺くべからざる大切なことである。故に、獨立に迅速に且つ正確に計算がなし得らるゝやうの練習をなすことは、本科教授の第一目的である。終學年の兒童の如きは、授けられたる算術につき、其應用に於て、計算が間違ひなく出来るやう學力が進んで居らねばならぬ。

生活上必須の知識

生活上必須の知識には、いろいろあるが、彼の度量衡貨幣等の制度を知ることや、又生業上の要項、例へば、賣買貸借交易等に關する實用の知識を得ることは、甚だ必要である。上級學年に進むに従ひて、實用的の教材が多く加はり居るので、この種の知識を養ふことができる。然し乍ら、この種の教授は、教授者の取扱ひ方によりて、どうにでもなる。極めて實用的に指導せずば、効果が無い。高學年兒童たるもの

は、度量衡貨幣及び時の計算に習熟すべく、尙ほ學年に應じて利息諸税銀行株式公債爲換貯金保險等に關する、日常須知の知識を得て居らねばならぬ。義務教育を終りたるもの、或は高等小學を卒業したる兒童にして、往々前記實用上の知識に缺けたるものがある、こは教授者の未だ注意の到らざりしが原因にて、然かく學力の進まざる所以である。

思考を精確にすること、之を等閑に附してはならぬ、算術教授の結果は、明瞭なる斷定確實なる結論に達せしめて、思考を練習し、又之を正當なる言語に表出せしむることを務めねばならぬ。本科が精神陶冶に與つて力あることは今更言ふを要せぬことであるが、複雑多様な社會に處して、沈著に考慮し、確實なる思考を以て事に當ることが、何よりも大切にして、將來ますますこの種の修養を要するのである。されば本科教授の中にも、上級學年に於ては、從來よりも、一層精確なる思考を養ふに注意し、思想の散漫不統一に陥るの弊より遠ざからしめ、外界の刺衝に迷はずして、自ら思考し、工夫し、綿密に事を處理し、物に當るの習慣を養はねばならぬ。算術を教授するの目的は、以上の諸點にあるを以て、各學年に於ける各兒童を教授

思考を精確にせよ

教授者の學力を豊富にせよ

して、この要旨に到達せしめねばならぬ。然して兒童の學力には優劣あるを免れざるが故に、其能力相應に指導することが必要である。

二 算術教授の順序

本科教授の順序には、各算法によりて相異るところあり、一定様式にて律することはできないが、こゝには終學年の算術科筆算教授の順序として、極めて一般的方法を述べやうと思ふ。

本科教授法を云爲するに當りて、一言御断りいたして置く事がある、そは何ぞといふに、教授法といふ中にも、算術科の如きは、方法にて苦心するよりも、教授者の學力を豊富にすることが極めて大切なることである。特に上級學年の教授には、教授者の學力に遺憾の點、毫頭これなくして、而して眞の教授ができる。實際のところ、教授者の中には、如何はしき知識をもちて、教壇上に立つものがある、生徒に急所を突かれて、返答に苦しむ教師もある、追究せられて誤魔化す先生もある、下級兒童ならばそれでも濟むだらうが、終學年兒童にては中々承知せぬ。吾人は、どこまでも教授者に向つて、本科の知識を豊富にせられ、同時に國定算術教科書の仕組み、且つ

は問題につきて研究せられ、教授の効果を發揮せられんことを仰望するものである。其他、教師の學力問題に附帶して論議すべきものあれども、こゝに之を略することとする。

算術教授の順序

さてこれから教授の順序に就て述べる、大體、豫備、教授、整理、練習、若くは應用の名稱にて可ならん、の三段階でよからう、豫備として、敢てクダクダしき説明と手數とを避けねばならぬのであるが、先づ第一に運算形式の練習、或は事實觀念の喚起及整理である、こは何れの教授にても、なすべしとの意ではないが、新教授の都合上、之をなすべき場合が多い、斯くて、目的、指示をする、教授すべき數理、計算法につきて明瞭に指示をなし、嚮ふべき所を知らせる、而し、目的指示は教授の最初に於てなすも差問へない、教授の段にては、例題の提出をなす、教科書に據るものなれば、其頁、算法、番號につきて注意を與へるのである。一度に數題の提出をなすも、或は一、二題に止むるも、それは教授の都合上、教師の識見に依る、提出の方法には、口唱と板書とある、教科書に依る場合には、兒童に問題を讀ましめ解説せしむることもある、何れにせよ問題の提出は、餘り時間を費さぬやうにして、且つ確實にせねばならぬ、問題提出と

例題提出

題意理解

解法説明

計算

檢答

質問

應用

伴ひて、題意を、理解せしむるのである、兒童等を促して、先づ、理會せしところを言明せしむるやうにすればよい。更に、解法、の説明をもなさしむるのである、この際には順序整然、論理明晰に述べしむることに練習せしむるやうにする、曖昧なる思想、不可解なる言辭につきては、根氣よく指導し訂正する、やがて計算をなさしむるのであるが、各兒童は、細心に落ち付きて、而も速に計算せしむる方に馴れしめねばならぬ。兒童は各自計算したる後に答を得ば、檢算をなして、必ず其正確なることに自信を置かしむるやうにする、教師の檢答をなすには、これ又特に教授力を要するのである、教師は機敏に立ち働きて、遺漏なく檢答をなし、題意と對照せしめて所要の答數につきて充分なる説明をなすのである。もし運算の徑路、其他につきて不明の點あらば、質問すべく命令して一々納得せしむるやうにせねばならぬ。之より應用問題を提出すべく、或は類題を課して練習をなす、其練習たるや多方面になさしむるがよい、即ち偶發事項を捕へ來りて、此れを解決せしむるも可、數關係を簡單にして暗算にて計算せしむるも可、或は問題を與へて計算式のみ、筆答をなさしむるも可、或は算式を與へてこれにて計算し得る問題を構成せしむるも可、要は

澤山に練習をなさしむるのである。殊に基本問題又は其他必要なる問題は、新教授と何等關係なき時にても時々練習さするがよい。

以上、極めて概要であるが、高學年算術教授の順序として遵據すべき一方法である、尙ほ特に高學年算術教授上の心得として附記したいことがある、それは文部省視學委員波木井九十郎氏が先年二三府縣の中學校數學教授を視察して、文部省へ報告したる復命書中教授に關する批評である、今其中より、二三の要項を左に摘載して讀者の參考に供することにせん。

一 教科書を株守し以て能事了れりと爲さず、臨機時に或は之を節約し、時に或は之を補足し、生徒をして完全なる收獲を得しむる固より不可ならずと雖も、周到なる用意の伴ふなく、漫然として左まで必要とも認むべからざる事項に對し、反覆縷説し爲に時間經濟を誤り、却て必要缺くべからざる事を逸するに至る如きは、大に注意すべきことなり

一 生徒の爲せる黑板上の演算を批評し、若くは誤謬を指摘するに方りては、特に口數の多からざることに注意し、簡明に適切に要點のみを説明し、生徒をして

釋然として理解せしめんことを期すべし、然るに往々漠然たる口調を以て、横道に誘ひ、生徒をして何等要領を得ざらしむる者あり

一 教師たる者授業を爲すに際し、豫め其準備を整へ、教科書の如きは之を精讀し以て一旦壇上に立つに及びては其説明に於て、應答に於て、物を囊に探る底の用意なかるべからず、然かるに準備の完からざるの結果、授業初より終に至るまで教科書を手より放つ能はざる者あり斯る教育者は自家の職責を反省する必要あり

一 智識授與の方法は、普通形式を具へたるもの、外、尙ほ臨機的手段に依り本來の目的を達せんことを勉めざるべからず、尤も斯る手段を採用するに方りては、各科の間に存する區劃を撤廢するは免れざる所なり、例へば距離の目測を體操科にて課し、重量の觀念は五貫十貫等一定の石塊を弄ばしむる間に會得せしめ、手形證書類其他日常須知のものは生徒の平常集合する場所に扁示し、注意を惹かしむべし

一 算術科の主とする所は、日常必要なる計算に習熟せしむるに在れば、其付與

する智識は成るべく廣く迅速に巧妙に之を實地に應用せしむることを務めざるべからず、故に密著の關係ある度量衡其他株券證書類等の設備は必要缺くべからざる筈なるに、實際は斯る注意を爲す者至て少し

一 問題を課するには、豫め問題毎に相當の時間を配當し置き、無用の事に時間を空費し、若くは時間時間の切迫に狼狽する如きことあるべからず、勿論平常時間を節約する心懸を必要とするも、難解のもの又は重要なもの、\textbackslash ためには、時間を潤澤にする、元より妨げざる所なり

一 授業に際しては、一意専心之に従事せしむる必要あるを以て、外界の事物に依り、注意を亂る如きものは成るべく之を遮絶すべし、廊下又は運動場に面せる窓に透明の硝子を用ひたる如き注意すべし

一 運算は正確なると同時に、迅速ならしめんことを要するものなるが故に、古來珠算に於ては能く競争練習を行はれたるものなるに此事なきは遺憾と謂ふべし

一 元來學級の組織は、學力の程度に於て區々同じからざるものを含むが故に、甲の容易に了解する所のものも乙に於ては頗る難しとする所のものあるを免

れざれば、生徒の質問は成るべく之を歓迎すべき必要あり、然るに教師中質問を喜ばざる者少なからず、殊に其甚しきは自家の説明の曖昧なるがために、質問を受けたる場合に不満の色を作し、之を冷淡に付し去る者あり

一 授業を爲さんとする者は、先づ教材の性質を秤量し之に相當する時間を配當し之れを授與するの順序方法を確定し、緩ならず、急ならず、以て當初の目的を達せんことを務むべし、夫の一時間又は一學年の初に、密若くは粗にして、終に粗若くは精なる俱に不可なり

一 説明をなすに謹嚴なる態度を以て明瞭なる言語に依り(特に語尾に注意し)多寡高低其度を失せず、談話叱罵に亘らざることに注意し、秩序整然適宜の速度にて進行すべし、若し躁急なれば生徒は其旨意を把握すること難く、遅緩なれば厭倦を促し易し

一 黑板使用の方法に困り、授業法の巧拙如何を知るに足るとは、一般教育家の定評なり、黑板使用に注意せざるべからざる素より言ふを俟たざるに、現時尙ほ余をして此言を反覆せしむる教育者の少からざるは、大に遺憾とする所なり

一 現今各學校の狀況校舍標本機械其他諸般の設備の完全せるに拘らず、獨り黑板に至りては其構造に於て又平日の手入に於て他の完全なるに伴はず、又採光に於ても適當の裝置を爲さざるを以て、板面眩射して板上の記事を視るを得ざるものあり、畢竟黑板なるものが執鞭者のために唯一の武器なることを知らざるの結果のみ

三 算術教授上の通弊

本科の成績をして顯著ならしめんには、教授上の諸弊につき反省するがよい、前節に記したる波木井視學委員の報告の如きは、大に服膺すべきものである。而も初學年よりして注意せねばならぬ。又、高學年の成績をば、良好ならしめんには、中學年の教授も大切である。其上は思考鍊磨の目的を達せんには、初學年の教授より秩序整然、適當の手段をとるべきであるが、中にも、中學年、即ち尋常三、四學年時代の算術教授に力を注かねばならぬ。何れの教科にても、每學年系統正しく且連關的に教授に注意を加へねばならぬが、就中算術科の如きは、最も順進的の教科なれば、前學年よりして其教授法に注意すべきである。されば初學年、中學年の教授を等閑

中學年の
教授に注
意せよ

視して、高學年の教授成績を云爲するは當を得たるものでない。偶々近刊の教育實驗界紙上、第三十卷第三號梅田梅次郎氏の所説は、吾人の言はんとするところを言明せるものにて参考とするに足る。氏は、算術教授上輕視せられたる推理の一方面と題して、形式材料にても思考は鍊磨することを得べしと述べ、尙ほ左の如き意見を發表せられたのである。

『前略』

梅田氏の
意見

○各算法の關係は思考を練るに必適した事項ではあるまいか。形式的材料中に於て更に思考鍊磨に適切なるものは各算法(加減乘除)相互の關係である、例へば $3+2=5$ 、 $5-2=3$ なりてふ簡單なる二教材は次の如き高尙なる心意の働きを要する問題即ち、

(イ) 或る數に2を加へたるものは5なりといふ。或る數とは如何なる數か。
(順次に數を擴張す)

(ロ) 或る數より2を減じたるものは3なりと、或る數如何。(同上)

右の如き類の問題を解かしめ得るのであつて、これが根本的要件は實に簡單

なる加減の關係 $\triangle + 2 = 5$ 、 $\triangle - 2 = 3$ を了解すれば必然的に推理し得るのである。更に乗除の關係に至りては思考を練るに最好適の事項である。例へば今茲に $3 \times 3 = 9$ 、 $6 \div 2 = 3$ なりてふ平易なる二數があれば次の如き高尚なる教材即ち、

(イ) 或る數を2倍したものは6なりと、或る數とは如何なる數か。(順次數を擴張す)

(ロ) 或る數を2で割りたるものは3なりと、或る數如何。(同上)

と云ふ如き類のものを難なく解かしめ得るのである。そしてこの原則の應用せらるゝ範圍は五六學年は勿論高等科乃至中等學校に迄及ぶのである。而してこれが萌芽は尋常科一二三學年頃にあるのである。

○加減乗除の四算法の因縁を知らしむることは中學年の重要事項の一である。

之に依つて之を見れば加減乗除の四算法の連鎖的關係を知らしむることは思考力の鍊磨には最も適切なる教材である。而して加減は總べての算法の根本である。減法は加法を理解し得て後初めて了解すべく、乗算九々は累加を授

くることに依りて兒童自身をして之を構成せしむべく、更に九々は乗法の根本となり又其逆算法に依つて除法を了解せしめるのであつて、これ等四算法の關係は恰も一家に於ける父子兄弟夫婦の如く相分離すべからざる因縁を有つて居るのである。而してこの關係を有つて居ることが前陳べたる如く思考鍊磨に最上の便利を與へて居るのである。故に尋常科の三、四學年に於て毎にこれが練習に注意して置いたならば高學年にある多くの應用問題は容易に解き得るのである。假令全部を解き得なくても問題を解くに際して大なる補助を與ふことは實驗上切に感ずる所である。

○結論

願ふに思考鍊磨だからとて敢て兒童の理解し難いやうな應用問題のみを課する必要はないのであつて要は兒童をして自ら思考せしめ得るやうな教材を課することに注意することが大切である。そしてこれが根本は、どうしても三、四學年頃に築いて置かねばならぬ世間一般の教授者否校長連中は教員を配當するに毎に一年と六年のみを重要視したやうな方針を取つて居るが、これは恰

も、植付けと收穫時さへ働けばよいと云ふやうな考へと同一であつて、全き效果を得る賢い方法ではない。いかに一學年がうまく行つても中堅の學年を輕視しては到底物になりそうな道理がない、これと同じで如何に優良な教員が腕に捻りかけた所が神様でない限り、二年三年もかゝつて助成された惡習慣が僅一二年位に矯正されそうな道理もない。一年かゝつた建築物でも一日で毀すことは出来る。しかし毀したものを建てるのと、曲げたものを直くすることは前者に比して數倍の勞力を要することを忘れてはならぬ。故に二學年の教授に於て成效せんとするものは先づ一學年の教授に於て成效すべく、三學年の教授に於て成效せんとするものは先づ二學年の教授の結果を顧みねばならぬ、以下四五六學年も順次皆この通りである。現時の算術教授界に於ける應用問題教授難の聲高きと共に高學年の成績が不良なりと云はるゝは單に高學年の成績が不良なりと云ふべきにあらずして、全く中學年の惡影響を受けて居るのである。故にこれが歎聲を除去し以て成績をより向上せしめんとするには先づ思考的材料の調査を文章的應用問題以外に迄進め、之を以て三四學年頃に於てこれが

特に終學
年教授者
の注意

解法の基礎を與へねばならぬ。偶、應用問題教授難の聲を耳にしたるより平素壇上に得たる所感を陳べて思考鍊磨に關し輕視せられたる一方面を開拓してこれが是非を先輩諸賢に問ふのである。云々。

尙ほ本科教授を有效ならしめんには、左の各項に注意して、之が弊を除去することに務めねばならぬ。特に終學年、兒童教授者の一顧を促す。

い、概算の練習不足なる傾きあり、務めて概算するの習慣を附くること。上級學年にては大にこの風を重んぜよ。

ろ、心算にて計算し得べき簡易なるものは態々筆算せしむるには及ばぬ、高學年にては特に注意すべきである。

は、目測、步測、力測等の練習不足なるもの多し。これがため相當の設備をなすこと。

に、標準量を記憶せしむることを怠るものが多い。例へば水一升は四百八十匁、二錢銅貨一枚は四匁等の如きをいふ、終學年兒童には其學年の教材につきこの種の記憶を確實ならしむること。

は、生業と經濟上、社會上の知識を授くるには、具案的にする必要がある、然るにただ思ひつきのまゝになす向が多い、注意すべきこと。へ、檢答の際には、たゞ答數のみ檢して、思考の正否、繁閑等につきて指導せざる向が多い、之を改むること。

と言語、文章、圖解等により、其思考を正確に發表せしむることの練習が不足なるものが多い、終學年兒童の如きは、發表的の練習を多くさせる必要がある。

ち、珠算の練習を等閑に附するは、普通教育上の大なる缺陷である、珠算を課する小學校の卒業生にして、家庭に於ける日常の計算に未熟なるものが多い。注意すべきである。

り、算術練習帖の整理、及取扱方法につきて指導せざるは缺點である。終學年兒童教育の如きは注意すべきである。

第四 日本歴史科

一 教授の要旨

小學校令施行規則第五條一項に、

日本歴史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス
國體の大要を知らしむるは、本科教授の實質方面にて國民志操を養ふは其形式的方面である、凡そ世界の邦國は、何れも特殊の事情を有し、特殊の發達をなして居るので、其國體は何れも同じではない。特に我國は、上に萬世一系の皇室を戴き、下に忠實勇武の臣民ありて、二千五百有餘年の久しき歴史を有し、萬國無比の國體である。此の由緒深き現在國家の成立、組織諸般の制度を知らしめんには、國運興隆の徑路、即ち最初建國當時の様態より、現代に至るまでの國運發展の事歴を知らしめねばならぬ。この國に生れて國體を知らぬとあつては、國民たるの資格はない、將たまた國民たるの甲斐がない、更に普通教育上より論ずれば、國民たらしむるの要素として、自國の歴史、特に其國體の大要は、是非共被教育者の腦裡に堅く印象せしめねばならぬ。尋常小學校にては五學年より歴史を教授することになつてゐる、歴史科以外他教科に於ても、歴史教材はあるが、本科を特設せるは先づ第一右の如き理由あるからであらうと思はる。然も、小學校卒業生につきて、國體の觀念等

に、つき、吟味するに、其、印象たる、薄弱、歴史教授の、効果、を疑は、ず、には、居、られ、ない、ものが多い。本科を教授するからは、必ずこの趣旨の貫徹を計らねばならぬ。

本科教授は、單に國體の大要を知識として收得せしむるのみに止まらず、心力の鍊磨をなさしむることも務めねばならぬ。凡そ歴史教授は、知的欲望を満足し、記憶想像、思考等を鍊磨する效多きが上に、特に其心情に及ぼす效力は偉大なるものがある。蓋し歴史は道徳上の觀念を具體的に示すものにて、具體的事例が人心を感動するの深きは、敢て言を要するまでもないことである。我國史を學びて、我が祖先が國家のために活動せし事例を知りて、思想感情の上に大なる陶冶を受くることは明白なる事實である。其、特に、忠君愛國の志操は、本科教授上、幾多の事例に接して、陶冶の效を全うすることが出来る。忠君愛國の志氣は、國民志操の中心にして、國家隆盛の元氣である。されば歴史科は修身科と相俟つて國民的志操の涵養に努むべき教科である。

歴史教授
と心力鍊磨

忠君愛國
の志氣

本科教授の期するところは、前述の通りである、而してこの目的を達せんとするには、教授方法の上にて注意すべきもの多けれども、教授者たるもの、本科に關する

基礎的觀念を確實にすることが極めて必要である。教授者にして、其、歴史的觀念、不確實ならんか、本科教授の如き多くは精神なき教授と化す。吾人は本科教授法を述ぶるに當りて、先づ國史教授者の有すべき基本的觀念につきて卑見を述ぶることとする。

二 國史教授者の有すべき基本的觀念

特に掲げて國史教授者の有すべき基本的觀念といふ、そは何であるか、余のことに言はんとするは國家的思想の養成上より見たる國史教授者の覺悟である。小學校に於ける歴史教授は、國家的精神の涵養こそ最も大切であるからである。この點につきて、吾人は曾て教材研究第五卷第八號紙上にて、意見を發表したことがある。吾人の所見は、今日にても毫頭變りはない。否々一層この點につき努力せなければならぬと信するのである。吾人は、左に、右教材研究紙上の卑見を轉載するに當り、尙ほ一言して置きたいことがある。それは千八百八十九年五月一日、獨逸皇帝が全國に對して歴史教授に關する本旨を示されたものである、其大要は、國史を教授するには、今世紀(十九世紀)の初年以後に於ける、社會經濟的狀態より、現

基本的觀念

時の社會政治的狀態に説き及ぼし、プロイセン王國が如何に國民の生命財産の安全を計り、又將來に於ても、從來の如く勞働者を保護すべきかを明らかにすべし。且つ現今の國家組織は國民の生活狀態を幸福にするものにして社會黨の主義の如きは、實施すべからざるものなることを明瞭に教授すべし。云々。

國家的觀念の涵養は、何れの國にても務めて居る。歴史教授はこの點につきて大に盡すべきである。今や左に國史教授者の有すべき基本的觀念につきて述べる。

一 緒論

世界に於ける最大強國と自らも許し、他も認めたりし露國をば物の見事に、殆ど其の根底よりして粉碎せる我が帝國の實力は、今や地球上の各國に識認せられて、外には、日本の勢威を渴仰して、羨望といふよりも、寧ろ、嫉望に近いものさへ有る。内には、戦後の經營てふ聲喧しく、あらゆる方面に於て、その事業の發展を講じて居る。この際、帝國將來の國民教育に従事せらるゝ教育家として、何れに愚はなからうと思ふ、否、油斷があつては濟まぬのである。そこで余は諸教科中最も國家的思想の養成に關聯深き國史の教授上、先づ教授者の有すべき基本的觀念ともいふべきも

のにつきて、卑見を述べやうと思ふ。余の所謂基礎的觀念とは、教授者にしてこの精神充實せずば國史教授の資格なしと斷言するに憚らざるところのものである。否、教育者としても容易に許すこと能はざるものである。或は酷言に過ぎたかも知れぬが、余は聊か直言したまでである。

二 國體につきて

國家の特質を語らず、國體の美を教へざる歴史教授は、普通教育上三文の價值もない。之を語りて歴史は生動するものである。之を知つて兒童は興奮するのである。反響のない歴史教授は、一場の駄辯に過ぎない。血湧き肉躍りてこそ歴史教授が生命あるものとなつたのである。さて、余はこゝに國體を語りて、賢明なる讀者に教ふるなどの僭越は敢てせぬ。而も自分の考へのあるところだけを記して、参考の一端に供することにす。

今や東洋唯一の立憲君主國で、國運隆々、眞に日の出の勢なる我が國は、開國以來純然たる國家の體を具へてある。皇祖神武天皇が天祖の御遺業を完成せむとして、高千穂の宮殿より遙々八重の沙路に棹して東征し給ひし後、橿原奠都より今日に

至る二千五百七十餘年の長年月を経たる金甌無缺の國家である。其初め天孫降臨の際、天祖の勅し給ひし御言葉は、實にこの比類なきめでたき國家の萬歳を豫言し確定し給ひしものである。

葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地、宜汝 皇孫就而治焉、

寶祚之隆當與天壤無窮者矣。

如何に雄大に、且つ尊嚴なる勅なるかな。皇祚の無窮、國體の尊嚴を示し給ひ、君臣の分を萬世に定め給ひしもので、吾等は生れてこの國に臣民たることを得るは、實に至幸至福の大なるものではないか。而してこの國は開關以來外國に屈伏せしめられたことはない。世界に國は多いが、何れも存亡興廢の悲惨なる歴史をくり返して建國せられたものである。仔細に歴史を觀察すれば、君臣の間に於て忌まはしき確執のみか、匕首を飛ばし、毒杯を強いられたる例も少くない。放伐にあらざれば、禪讓を迫つたものである。占領にあらざれば、革命に血を流したものである。我が帝國は斯る亞流の上に超然たる完全無缺の國である。歴史を緝けば、治亂の蹟瞭々たれども、國內に於ける大小氏族の權力争ひに過ぎない。而も天下に

號令せんとする優者は、いつも上 皇室を奉戴せんとしたのである。天下の士民は 皇室の下に頼ることは恰も慈母の赤子に於ける如きものがあつた。時に皇威の式微ありしは實に恐れ多き次第であるが、大義名分の光明はこの大八洲の中より知らずく 發揮して、國家の歩調は立ち直り、今日の大御代とはなつたのである。

萬世一系の 皇室を戴く國民は、我々日本國民である。而して 皇室は亦我々臣民の宗家として仰ぎ奉らねばならぬ關係がある。日本國の主權者たる 天皇陛下は、日本國民の祖先の御本系の御嫡統を受け繼がせ給へるなれば、我々は、大御祖としても専心仕へ奉らねばならぬ。地球上には國といふ國は澤山ある。而も君臣の關係いや深厚なるが上に、親子の情誼濃厚なるものはたい我が日本帝國のみである。教育者たるものは、この點につき深く注意しなければならぬ。御國に力を盡すは、大君に仕へまつると同一轍に歸するのである。大君の御爲めに盡すは、我等の祖先の御心に叶ふものである。されば忠君愛國は、我が道德にては一致するのである。これ國の特色である。教育家たるものは大にこの道を鼓吹せねばなら

ぬ。

参照

帝國憲法(第一章の中抜萃)

第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行

フ以下略

末の世の末の世までもわが國は

よろづの國にすぐれたる國

宏 覺 禪 師

三 今上天皇陛下の御盛徳

我が 皇上の御威徳を仰ぎて、御盛徳の一端を現在の生徒に感佩せしむるは教育者の任務である。

さて我等日本國民が今日世界に於ける立派なる國民として、地球上に横行し濶歩

することを得るは、國家の勢力が隆々たる故である。國家の盛んなるは即ち我が皇上の御威徳の然らしむる所である。明治元年戊辰八月二十七日、大統を繼がせたまひしよりこゝに四十年、朝夕この國のために、この民のために大御心を勞し給ひて、國威の發揚に、國權の振張に、臣民の撫育に務めさせ給ひし結果、即ち今日の隆運を致したること、拜察しまつるのである。明治新政の初めに 皇上は親ら紫震殿に出御し、恭しく五事を以て天地神明に誓はせ給ひしを拜誦すれば、左の通りである。

五條の御誓文

- 一 廣く會議を興し萬機公論に決すべし
- 一 上下心を一にして盛に經綸を行ふべし
- 一 官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す

- 一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし
- 一 知識を世界に求め大に皇基を振起すべし

國家のために、臣民のためにこの新政の大方針を示されて、著々として國運の振起

に御心を勞させ給ひしをしのびまつれば、なか／＼にたふとくも又有りがたき極みである。之より歐米の文化は遺憾なく輸入せられて、見事に消化し、國際關係も親密になりて、政治機關も漸々に改進の域に向ひて、明治二十二年の紀元節に、憲法を發布し給ひ、二十三年には國會を招集せられ、且つ同年十月三十日には、有がたき教育勅語を下したまひて、國力の強固は一層完成して、國民の安寧と幸福とは、ますます、確實に進歩したのである。ある年の御製に

いにしへの文みるたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと

と仰せられた。いかに其大御心の深遠なるか、草莽の我等は實に聖慮のかたじけなきに感泣に堪へぬのである。

我が文明は、皇上の御力によりて生まれたものである。而して我が國是に對して敢て妨げを爲すものに對しては、仁愛なる御心を垂れさせ給ひてその非を改めしむるの道をととりて友邦の交誼を重んじ給ひしことは、他國の君主の及ぶこと能はざる所である。殊に東洋平和のためには一層御心を勞はらせ給ひて、明治二十

七八年には、頑迷なりし清國を膺懲したまひて東洋の平和を維持したまひしことは、すでに十餘年の昔とはいへ今尙ほ眼前に活動せる心地がする。然るに明治三十七八年露西亞を懲らし、堂々たる正名の軍師は、終始一貫の勝利であつた。あゝ我が、皇上の武威は、東洋否世界に於ける妖雲を攘ひて、正義の光明を宣揚したのである。帝國臣民特に教育家たるものは、深く謹みて宣戰の大詔と戰後の詔勅とを奉戴しなければならぬ。

戦後の國勢は前古未曾有の發展である。滿韓の經營、清國の誘掖、日英の同盟等對外的活動は實に目覺ましい。内には堂堂たる論功行賞ありて、今や實力培養に汲汲たる時となつて居る。斯く國運の順調に向ふは、我が皇上の御威徳にあらずして何ぞ、尙ほ折々の御製を拜するに、みなこの民のために大御心を寄せさせ給へるが多い。今其二三を記しまつらむ

子らはみないくさのにはに出ではて、

翁やひとり山田もるらむ

世とともにかたりつたへよ國のため

いのちをすてし人のいさほを
ちはやふる神の心になふらむ

わがくにたみの盡す心は

我等は幸にもこの大御代に生れて教育の大任を掌る職にたづさはるのである。
我が皇の御徳を仰いで、未來の民草をすぐに生ひ立たしめねばならぬ。

御民われ生けるしあり天地の

さかゆる時にあへらくおもへば

海犬養岡麿

四 列聖の御仁徳

御仁徳

こゝにまた列聖の御仁徳の一斑を記しまつりて、歴史教授者といはず、國民教育者
のために聊か参考の資とせむ。

我が列聖の御仁徳は一々仰ぎまつるもなか／＼に畏ききわみである。民の寵の
烟りに御心をとどめさせ給ひしもかしこく冬の夜寒に龍の御衣をぬがせたまひ
て、民の凍えをしのびたまはりしことも記しまつるだに畏れ多き次第である。さ
ては一老吏の率文堂の草云々の言葉に、深くも政を省みたまひし天曆の帝といひ、

殘民争採首陽巖云々の詩もて、驕臣を諷戒したまひし後花園の帝といひ、大御心は
常にこの民のことにのみみたまはれたまひしのである。あゝ御歴代の、臣民をば大
みたからと稱せられ、國土臣民のために御心をいためさせ給はりしことは、史上に
炳然としてある。こゝに中世の御製二三を記しまつらむ。

後宇多天皇

時しあれば谷よりいづるうぐひすに

世をたすくべき人をとばばや

後鳥羽天皇

夜をさむみねやのふすまのさゆるにも

わらやの風を思ひこそすれ

光嚴天皇

てりくもりさむきあつきも時として

民に心のやすむまもなし

後醍醐天皇

世をさまり民安かれといのるこそ

わが身につきぬ思ひなりけれ

後柏原天皇

おさめしるわが世いかにと浪風の

八十島かけてゆく心かな

歴代の 天皇はみなこの大御心にて、臣民をばいつくしみ給はりしのである。この國土を創始し開拓せられし大業は、みな 皇室の御庇陰によるものである。我等は實に感謝の念に堪へぬのである。彼の儒教といひ、佛教といひ、農桑工藝醫藥賑救の道に至るまで、直接に或は間接に 皇室の御勸奨によりて發達したるものである。現に今日の文明は、全く我が 皇上の御威稜により斯く長足の進歩、恐らくは世界に比びなき大發展をなしたのである。清國を見よ、韓國を見よ、同じく東洋にありながら、其國民の肩身の廣狭、我と比較して果して如何であらう。あゝ文明の恩澤に浴みするのみか、世界の大國民として濶歩することを得るは、眞に人間究竟の幸榮ではないか。我等は發奮してこの光榮に對へねばならぬ。また列聖

の御仁徳に報いねばならぬ。歴史教授に當るものは折に觸れ機に應じて、積極的に國民の義務を説かねばならぬ。

参照 小學校令施行規則第五條

日本歴史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス尋常小學校ニ於テハ建國ノ體制皇統ノ無窮歴代天皇ノ盛業忠良賢哲ノ武勇文化ノ由來外國トノ關係等ノ大要ヲ授ケ以テ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ヲ知ラシムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ稍詳ニ我國發達ノ蹟ヲ知ラシムヘシ
「下略」

五 臣民の忠直

忠とは國君に對して、精神的に臣民たるの義務を盡すの行爲である。忠なる行爲につけて、遺憾なく發揮せる人種は、我我日本民族である。我等終生の大業は、如何にせば忠を全うし得べきかの點にあるのだ。忠臣義士といひ、忠勇無雙といひ、忠魂義膽といひ、忠なる名稱は日本歴史の上に萬丈の光彩を放つてゐる。如何なる

臣民の忠直

舞臺に於ても、如何なる局面に於ても、忠なる立物が時代思潮の中心點となつて、順風に帆を孕ましつゝあつたのである。義は山嶽よりも重く、命は鴻毛よりも輕し、として君父の馬前に快く討死したのである。時には其忠なるものが主君とか君侯とかに直接に盡すことになつて皇室に對しては、非常に恐れ多いことであるが、而も忠は我が國史上の彩華であると共に、亦日本國民の生命であつた。彼の大伴氏の家訓として、

うみゆかば水づくかばね 山ゆかば草むすかばね

大君のへにこそ死なめ のどには死なじ

云々のごとき、又東國武士が、

額に痛手を負へば負へ そびらは見せじ君がため

向ふ野山のつゆよりも いのちはかろし名は重し

との慨を以て敵に向ひたるがごとき、何れも日本民族の特色を表したものである。今日本民族の赤誠を披瀝せる思潮二三を左に擧げやう。

降る雪の白髪までに天皇に

仕へまつれば貴くもあるか

萬葉集 左大臣 橘 宿禰

筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど

古今集 作者不詳

天皇が御蔭にますかげはなし

山はさけ海はあせなん世なりとも

新勅選集 鎌倉右大臣源實朝

君にふた心我あらめやも

物みなはかはりゆけどもあきつ神

玉鉾百首 本居宣長

わが大君の御代はとこしへ

皇室の御稜威と列聖の御仁徳と相待つて、この萬世不朽の國體は成立ち、臣民もまたいつの時代に於ても、皇恩に感泣して、赤誠をさゝげたのである。鎌足一たび起つて中、大兄皇子を翼けて、蘇我氏を仆したる如き、清麿の一喝に奸僧道鏡の心膽を寒からしめたる如き、弘安蒙古の撃退といひ、楠公新田諸公の忠誠といひ、殊に彼の暗黒時代、戦亂のみの際にも忠義の曙光或は尾張に、或は中國に、近畿に、ホノメキつゝありしが如き、下つて明治維新の大業といひ、はては明治文化の發展といひ、近くは日清戦争、及日露戦争の如き、みな國民の忠直を遺憾なく發揮したものである。

今や我が國威は隆々として、旭日の世界に照臨したるが如くである。この國威の下に立つ教育者たるものは、奮勵一番。國君に對し又祖先に對して忠直無二の臣民を養成せねばならぬ。

ますらをは名をし立つべし後の世に

きゝつぐ人もかたりつぐかね

大伴家持

虎吼ゆる國のさかひもものふの

まもるかざりはやすけかりけり

小野古道

六 結 論

以上は國家的思想の養成上先づ教授者の有すべき基礎的の觀念の大體である。敢て之にて充分といふ譯ではない。尙其他の注意も入用であるし、教授方面の工夫も必要であらう。兎に角今後の歴史教授は、外國との關係につきて一層注意せねばならぬ。それには、國民思想を堅實にして、其上にて諸種の交渉を語らねばならぬ。

單に歴史教授ばかりとはいはぬ、修身の教授の如きも、この觀念を確實にしてかゝ

らねばならぬ。兎角今の教育は、細いところばかりをツ、キ散らして、大局を顧みぬ弊がある。依つて卑見件の如しである。(此稿明治四十年起草)

三 歴史教授の順序

教則第五條に

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク圖書、地圖、標本等ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシメ特ニ修身ノ教授事項ト聯絡セシメンコトヲ要ス

とあり、本科教授を全うせんには、必ず當時の實狀を想像し易からしむるやうにせねばならぬ。されば本科教授に先立ちて、左の用具をば準備するがよいと思ふ。

教授用具

- (1) 地圖 現今の地圖、沿革地圖、戰狀圖等。
- (2) 表類 年表、系圖、統計圖。
- (3) 肖像 教科書中の人物の肖像。
- (4) 繪畫 建築物、彫刻物、軍艦、武器等の畫、風俗、風景、戰爭等の繪。
- (5) 寫眞 古蹟、遺物等の寫眞。
- (6) 實物 武器、土器、石器、文書等。

教授の順序

以上の教具につきましては、出来るだけ研究的準備をなすべきである。斯くして、教授の段となる、其順序の大體をば左に述べる。

第一、豫備である。郷土、家庭等にて見聞せし事項、若くは他教科にて學習せし事項、又は前時間に授けし知識にして、新に授くべき事實に關係ある既有の觀念を分解し、且つ整理する、更に之を具體的に述べれば、修身、讀本、地理等に於て授けたる事項、若くは郷土の史談、傳説、歴史的の建築物、社寺、城砦、古碑、墳墓、古蹟、古記録等を引用するか、或は國民生活上の事項、即ち風俗、習慣、祝祭日、國民歌、諺辭等に據るか、又は教育的昔話の類を引用して、新材料を教授するの豫備とするのである。尋常小學校の歴史教授にては豫備に一段の注意を拂ふ必要がある、殊に新教授に繼續せる前日の教授事項に就ては、よく吟味して精確なる知識となりたるやを突き止めねばならぬ。要するに豫備にては、喚起せる舊觀念をば復演せしめて、整理結合を確かにすることを計るべきである。こゝに注意すべきは、事實の骨子たるべき點を舉示して、舊觀念の整理をばなすべく、附帶的事實や、或は潤色の事柄をば、サモ勿體らしく問答などするに及ばぬことである。又必要ならざる事實に拘泥して、あた

豫備

教授

時間を空費することをも避けねばならぬ、若し顯著なる事實にして、すでに他教材に於ても幾度か現はれたる教材の如きは、或は豫備を省略するも可なるべく、時には其反面及側面より觀察し、推考せしむることも必要である。上級兒童に對しては、特に時世の變遷、時代の特徵、史的事實の經過につき、推究的に、豫備の手段をとるべき必要がある。

次は、教授の段である、準備せし教具を使用して、熱心なる説話もて直觀的教授をなすのである。即ち一單元の全教材を適當に分節して説話し、各節を復演せしめ、更に全體を纏めて、修述せしむるのである、而も教材は眞實なるべく、傳説の類は傳説として授け、私見を加へないがよい。漫然たる説話、殊に必要ならざる教材をば臚列して、講談師風の演述は禁物である、教材の要項は系統正しく板書するもよいが、そは必ず特に指示する必要ありて記帳せしめ置く事項に限るか、説明上注意を集中せしむるに足る事項か、何れも板書の必要あるものでなければならぬ、然し説明の進行と共に、順次に板書して、一目瞭然たる表に作りて示すことは必要である、又教材の進むに連れて、必要上他の事實と比較して其異同を明らかにすることもある。

應用

り、其際場合によりては、一般の法則原理を抽出することもある。尙ほ注意すべきは當日の教材をば、前に授けたる教材と巧みに連結することである。時間上の連続をも計るべく、事實の経過経路の連結をもなすべく、史的事實發生の地理的關係をも明瞭ならしむることである。時には人物の行爲につきて、當否の判断をなさしむべく、或は事實の原因を推究せしむべく、結果をも省察せしむべきである。最後の應用とも認むべき段に於ては、口頭又は筆述に於て、歴史的事實を種々の方面より反覆練習せしむるともあり、或は年表、人名表、事實の連續及び關係を圖表に製せしむることも必要である。或はすでに識得したる一般の原理法則を兒童の身上に應用せしめ、或は他教科目の事項に應用せしむるもよい、殊に適當なる時機に教科書を講讀せしめて、よく之に歸結せしむることを主とせねばならぬ。教科書の讀解は、或は兒童の學力にては覺束なき點もあるやうである、教科書に適合すること必要なれば、讀解し得らるゝやう指導してやる必要がある、然し、餘りムツカシキ、史的解釋などせぬやう大體了解することを得ば、それにて足ることゝせねばならぬ。

用心力の活

以上は歴史教授順序の概略であるが、高等小學校の兒童等には、特に、其材料に、應じて、彼等の心力を働かしむるやう、教授の活用を講ずる必要がある。史的事實をば、たゞに彼等の記憶にのみ止めんとせずして、判断推理せしむることに力を盡すべきである。時には兒童等をして身を當時の有様に置かしむることもあり、或は自己が其位置に居りたるが如く感せしめて、推究せしむることもあらねばならぬ。尙ほ上級兒童には、歴史地圖を使用して、之を直觀し、此を讀ましめて、史的觀念の養成を計ることも必要である。

尋常小學校の教授

尋常小學校の歴史教授と高等小學校とのそれとは、教材取扱上は勿論教授方法の上にも差異あるは言ふまでもないことである。尋常科の教科書は、國初より現代迄の概要を説き、高等科の教科書は、更に進みて稍高尙なる歴史上の知識を得しむるを目的として、尋常科よりも材料も豊富にて特に制度文物風俗等につきて記述してある。之が組織及び取扱上の詳細は、編纂趣意書によりて明らかであるが、尋常科の教授にては日本歴史につきての梗概を授くればよいので、著名なる人物の傳記及び顯著なる出來事を知らしめ、以て大體の歴史的觀念を附與し、國民的志

操の養成が出来ればよい、故に郷土史談、國民的傳説、日常の出来事等の趣味あるものをとりて、教授の出発点ともなし、又歸結ともなすべく、其他直觀的方便物を以て、彼等に理解し得らるゝやう、親切なる具體的教授をなすのである。抽象的の説明難解の史的名稱等を強ふる必要はない。又細微なる出来事を教授したり、又さまざま必要な事柄は、よし教科書に記しありとも、強いて記憶せしむるには及ばぬ、而も重要な事蹟等は確實に印象せしむるがよい、凡そ何れの史實、又は人物の事蹟にせよ、必ず其特色、異點あるべきにつき、教授は之を了解せしむることに務むべく、復習の如きもこれに重きを措くべきである、要するに教授者は、教材に關する歴史眼を豊富に、且つ犀利に有して、教材の取捨をなして教授をなすべきである。教則の要旨を貫徹せんことが主眼なれば、本科の教材は、教授者の活殺自在なる手腕に俟たねばならぬ。

高等小學校の教授

高等小學校兒童に對する教授は、必ず尋常小學校に於ける教授材料を基礎とし或は之を引照して教授することに務むべく、又他教科に收得せる教材、若くは、兒童が家庭、及讀書等によりて知り得たる舊觀念をば披瀝せしめて、教材をば活用せしむることに務め、後に教師は適確なる説明、判斷等をなして教授を完うすべきである。たゞに教材をば敷衍したるのみにて、何等取りとまりなき教授に終るが如きは、避けねばならぬ。教授の進行と共に、一事實の判定につきては、之を現時の開化に照らして、應用的教訓をなすことあるべく、更に問答式の教授には、事實の真相を深究せしめ、尙ほ其要點をも摘舉せしむるやうに仕向けるのである。因果の關係を推究せしむるなども比較的多くなさしめねばならぬ。

四 小學校歴史科の成績につきて

本科の成績を案ずるに、口答にせよ、筆答にせよ時代の觀念が明瞭でないといふ感が多い、こは本科には最も大切なることであるが、この種觀念の不明瞭不確實なるは本科成績上甚だ遺憾なることである。教科書によりて教授し乍らも、年代表を示して、この觀念をハッキリと系統的に兒童の腦裡にうち込み、教科書の終りにある表を利用することも必要である、さて、それを基礎として、事實を記憶せしむるのである。假令は南北朝時代とはいつ頃の時代であるかといふに、其前後の時代を知りて、凡そ紀元何年頃と見當がつき、何々天皇の御代なりと判定するやうになつ

時代の觀念の不明

事實の記憶と叙述の不精密

て居らねばならぬ。教授者の注意によりて、確に時代觀念をうち込むことが出来ること、思ふ。

歴史上の事實を記憶し、之を叙述すること、が兎角不精密である。これは教授者にも反省して貰はねばならぬ。即ち教授の際、説明に一定の順序なく、事實の聯絡輕重にも注意せず、たゞ雜然と注入教授をやつたばかりで、教授の結果を纏めざりしが故である。また兒童とても復習を怠つたり、且つ觀念を再生せしむる際に不注意なる點もあり、自分勝手の解釋をば餘分に附け加へたりして、不精密なる答稿を出すやうなことになる。要するに、これは教授者の方に於て大に反省せねばならぬ。

兒童の答案中、やゝもすれば、史的名稱を正確に記憶せざるものを見受ける。人名地名、史的事實にても、多くは幾分の錯誤がある。菅原道真をミチダネとし、太宰權帥をダダイノゴンノツツとしたり、近松門左衛門を門ダエモンと讀んだり、後醍醐天皇をゴザイゴ天皇としたりしてある。また、史的事實をば明瞭に教へざりし、がために、元弘の變といふことを聞かれて、直に元寇と誤りて答へるものも、多い。斯の如き誤りを生せるは、教授者に於て言語を正確にせざる過失と、説明に力を入れ

史的名稱の曖昧

地理的觀念の曖昧

ざるの罪と、復習法を等閑に附したる等の失點に基因するのである。

教授者の注意の足らざるがためか、歴史科の成績として最も大切な地理的觀念の曖昧なるものが多い。兒童は事實談は相應にすることが出来る。されどそれが如何なる土地に起りしことか、其場所につきて明瞭なる觀念がない。郷土を基點として何れの方向に當れるか、それすら不明である。蒙古は何れの邊に襲來したのか、坂上田村麿の征伐は何れの土地にまで及んだのか、源平の對抗は如何なる地點に演ぜられたのか、反問して見ると、確答は出來ぬ、これ教授者が地圖を利用してざる罪によるので、本科教授者の猛省すべき點である。

系圖の記憶不完全

多くの成績を案するに、系圖に關する記憶が甚だ缺乏してゐる。ある不注意なる小學校の成績はこの種の觀念が皆無であつた。平清盛は如何なる系圖の人か、源頼朝は如何、北條時宗は誰の子であるかと問ふても、其答案は誠に覺束ない結果を呈するのである。望むべくんば御歴代の御名稱をも拜誦せしめたい。將軍の歴代等は無論暗誦せしめたい。されどこの種の注意たる甚だ不行届きである。これ教授者がこの點に氣付かざりし罪にあるので、今後大に反省してもらひたい。

小學校の歴史教授なるが故とはいへ、教ふるものも學ぶものも事實の真相を究むることをせず、皮想の觀念を以て満足して居る。一の事實、某の事蹟を教授するにも、説明が具體的ならず、而も形式的の辨解に過ぎざるの傾がある。原因結果を説くことが淺薄で、事件の經過を説き行くことが誠に皮想的である。さればそは何故ぞと問へば、最早詰まりて答は出來ず、再三反問すれば、たゞ同じことを繰り返すばかりのものが多し。政を執るとは、どういふことかと問ふても、何のことやら分らぬ。何のために戦争を起したかと問はれて、たゞ誰々が大に怒つたからであるといふ、なせ怒つたのであるかといふと、これ／＼であるからと答へる、一步進んで其原因を突くと、最早答へは出來ぬ。土地の争奪、政權の争等につきての觀念がなしい。執權とは何をやる役か、大連とはどんな職かと問はれて、答へに窮してゐる。これ教授者には名稱のみの傳達に止めし誤りあり、兒童はまた器械的に記憶せし失點に因るので、兩者共に將來反省すべきことである。

兒童の答案が一目瞭然たる形に整理されてないこと、換言すれば、甚だ雜然たる形に於て表はれて居ることは、これもまた成績上より見て反省せねばならぬこと、思

ふ。戦争につきての答稿の如きは、表解的にでも記すやうに指導すればよい。然るに餘りクド／＼しき長文を書き、前後亂離の答稿が多い。これは教授する際に、板書を系統的になさざりし罪に依るので、教師も骨折り、兒童も苦心して、さまで効果は表はれぬのである。これは教授の上にて大に工夫する必要がある。敬稱敬語を用ふることも、材料によりては、等閑視してはならぬ。天皇の御名を稱ふるにも、また將軍、忠良賢哲を呼ぶにも、敬語を使用せしむるがよい。次に彼の年號も著しきものは、教授し置き、時々繰り返して暗誦せしめ、それと事件との聯絡を圖るやうにするがよい。これらに關しても、答案は誠に不出來である。兒童の歴史成績を判するは、前記の通り口答と筆答とによりて、記憶の良否推斷等を確かめ、やがて國家思想の養成を計るやうにせねばならぬ。切言すれば、歴史的の觀念を作りて、日本國民たるの志操が堅實となるまでに到著せしめねばならぬ。この志操の堅否有無は、本科成績上の生命ではあるまいか。兒童の提出する答稿は、筆記帳にてもよい。或は半紙、罫紙何れでもよい。前記の注意によりて訂正指導してやるべきである。而し著者がこれまで見たりし成績

は、みな同じやうなもので、歴史科と云ふ名稱になつてゐるばかり、實に綴り方といつてもよいやうなものであつた。もし、一歩進めて年表を作らしむるとか、將軍歴代表を記さしむるとか、戦争の原因結果をば表解的に表はさしむるとか、或は挿入圖の説明をなさしめるとか、或は歴史地圖を畫かしむるとか、或は某時代の出來事を概括せしむるとかいふ如き、少しにても苦心せし作品が表はれて居ないのは、本科のため惜しむべきことであると思ふ。

以上は、吾人が小學校卒業兒童につきて、直接に試験したるもの、或は中等學校入學試験に應じたるもの、歴史科の成績、或は教員檢定受験者の成績等によりて、概括したる判定である。本科教材は、永き年代に亘りて、其錯綜紛糾せるものが多い、従つて兒童等の容易に了解することを得ざる事蹟がある故、教授したるすべてを記憶せしめんとするは、或は無理ではあるまいかと思はるのである。吾人は、教授者に向つて、教科書の活用を希望する。而も教科書のすべてを記憶せしめんとするは、考へものである。本科成績の思ひの外、舉がらざるは、教材方面に、缺陷、否、重荷があるのではあるまいか、敢て實地教授家の研究を要望する。

實地教授
家に對す
る要望

第五 地理科

一 教授の要旨

教則第六條第一項に曰はく、

地理ハ地球ノ表面及人類生活ノ状態ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ又本邦國勢ノ大要ヲ理會セシメ兼テ愛國心ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

自然と人
類

と、地球の表面に關する知識を與ふことは、即ち自然地理に屬するのである。この兩方面は極めて密接なる關係あるものにて、自然が人類の生活に影響を與ふること至大なること、又人類が如何に自然をたよりにて生活を營むか、又如何に自然を利用して人類の開化を進めつゝあるかを知らしむるのである。されば自然と人世との關係につきては、兒童に了解なし得らるゝ程度に於て、具體的に教授することを計らねばならぬ。この故に本科をして單に異郷の山川地名物産等を暗記せしむるを以て能事足れりとしてはならぬ。

本邦國勢の大要を知らしめよとは、國民開化の内容、換言すれば國運進歩の情態を

知らしむることである、即ち政治、經濟、交通、軍備等の有様につきて指示するのである、本邦の地理教材を教へて、之を知らしむるは勿論のこと、諸外國の地理を教授するにしても、之を我國の現状と比較せしめ、以て世界に於ける本邦の位置を明らかにせねばならぬ。この故に、本科教授をば、内外國の政治、經濟、交通、軍備等につきての數字的記憶に止まらしめてはならぬ、又徒らに地理上の觀念をのみ與ふることに偏してはならぬ、歸着するところは、人類としての吾人の責任如何を感得せしめ、又特に眞摯着實なる愛國心の養成にあることを忘れてはならぬ。

本科教授の要旨をば究めざるが故か、將た本科教授上の確信なきが故か、多くの教授者は、如何はしき教授をして居る向が多い、吾人は本科の實地授業を見て、其甚だ實際に迂なるの感を深ふると共に、他は彼の國語教授などと何等擇ぶ所なきに失望せること再々であつた、地圖を示して教授するとはいふもの、中には古い古い地圖にて、而も教室用としては不完全なるものを、淋し氣に教室の一隅にかけて、其指示する工合などは實に不精確なるものである、其土地と他の土地との關係を語らない、郷土との比較にも、關係にも注意を向けない、山と川、都會と交通、生業等の

關係をば具體的に説明しない。ポツン／＼と孤立さして教へてゐる、其教授の無趣味なる言語に絶して居る、時には山の高さ、川の長さなども教へる、然しそれが郷土の山川とも比較せぬ、他の既授の知識とも比較せぬ故、山の高さ、川の長さが無意味に葬られてしまふ。特に度々遺憾に堪へざるは、教科書の利用法であつた。讀本と同じやうに取扱つてゐる、挿入せる地圖を活用せぬ、繪畫を利用せぬ、題目に注意させぬ、聯絡を顧みぬ、板書事項と結著せぬ、教授用大地圖と對照しない、書中の挿書を擴大して説明しない、出すべき時期に於て、標本、寫眞、其他繪畫模型を出さない、而してこれらの準備は至つて粗末である、斯の如き教授にして地理の觀念を明瞭ならしむることができやうか。本科の要旨を達することができやうか。土地と生業との關係を、説き之を人間の活動て、方面より觀察して、教授する向は、少い。經濟的の眼光に照らして切實なる地理教授をするものも甚だ少い。兒童の平素見聞せる製産品によりて、教授を進行するものも少い、兒童をして圍集してある澤山の教材を見す／＼逸して仕舞ふものもある、然し中には其製産品等を示して教ふるものもあるが、如何にして之がこの地に輸送されたのか、それは一向

に語らない、品物はよく見せはするが、まだ其價値を言はぬ、それ故兒童等は身を入れて教授を受ける氣にならぬ、地理を教授するものは、土地と、生業と、人間の活動との三點に注意して、教授を完うせんことを期すべきである。

二 地理教授の順序

地理教授にも幾種の方法がある、兒童の學力程度により、教材の性質にもよりて教授法に相異がある、先づ初歩の教授につきて述べんに、本科は、初め兒童の直觀に訴へて、其知識を確實にし、理解を容易にせんことを計らねばならぬ、而して兒童の實地に目撃することを得る材料は、其郷土の地理的事項である、即ち初歩の教授は郷土地理の觀念を興ふることを主とし、之を基礎として漸次郷土以外の教授を理會せしむるやうにする、斯くせんには各種の教具を要するのであるが、地圖の使用が最も大切である。地圖を使用する前に、地圖につきて教授する必要がある。

地圖の指導

地圖につきての指導は、尋常五學年の初めに於て、方角を教へる、こは開發的及び復習的に教授するのである、次には符號を教へる、進みては地勢の想察法につきて、推究的に教授するがよい、山脈の位置と土地の傾斜及河流との觀察、或は河流の方向

初歩の教授

と土地の傾斜との想察、山地と平野と産業との推究、或は河流の曲折と流域地、或は海岸の屈曲と港灣及都市等の想察につきて指導する。尙ほ學力の進歩、教授の進行と伴ひて、地圖の種類、或は描圖法につきても指導せねばならぬ。斯くて教授と共によく地圖を讀ましむることを計るのである。地圖を觀察して、兒童は直に山川、都邑、平野、港灣につきて知り、某々地は如何なるところなるかが、教授をうけぬ前よりして、自分で理解のできるやう指導せねばならぬ。而も略圖を多く練習せしむるやう仕向くるのである。こは五學年よりして、毎學年共練習をなさしむるがよいので、教へたる事柄は直に描圖ができるやうに指導すべきである。

地理教授の順序

地理教授の順序につきて其大要を述べる。郷土地理を教ふるには、第一教師は豫め實地を踏査して、觀察及説明につきての豫定案を作り置き、教授に臨みては、兒童と問答して地圖を描き、或は説明を與へ、最後に整理をなす、之をなすには問答をなすもよい、復演せしむるもよい、或は筆記描圖等を課することもあらねばならぬ。時には兒童を引率して、學校外の實地觀察をなさしむることもあつて然るべしである、若し一般地理の教授ならば、豫備にて目的指示、既に授けし事項の復習をなさ

しむることもあるべく、旅行其他の経験を復演せしむるもよい、斯くて教授の段となる、地圖により且つ板上に略圖を描きつゝ、尙ほ板書もなしつゝ、一單元を數小節に分ちて、指示し明瞭に説話する。各小節の初めに、部分目的を指示するなどは必要である、問答復演は各小節毎に行ひ、更に一括して行ふやうにすべきである。ここに注意すべきは、地理教授をして徒らに種々の事項を暗誦せしめんとしてはならぬことである。教材の授與をば成るべく關係的ならしめ、相互聯絡せしめ、結合せしめ、因果或は影響等につきて、考察を加へしむることを重んずべきである。即ち自然と人生との關係、教授せる土地と隣國、若くは他の地方との關係、郷土及本國との關係、國民の性行と國勢との關係、其他必要上諸種の關係につきて推究せしめねばならぬ。斯くて兒童の精神に何ものかの活動を與ふるやうにすることが必要である。この種の取扱ひをば教授上に適用せんか、兒童は教授を受けたる土地及び人民に對する活動力、即ち生産力等につきて注意するやうになる。斯くして地理教授が効果を奏することになる。されば、徒らに記載されたる教材の名稱を暗記せしめて、本科教授を完うしたりと自得するものゝ如きは、今後大に反省せね

地理教授
と精神活

ばならぬ。

教授し終りたらば、更に主眼點と附帶事項とを摘出せしむるも可、或は要點の約説をもなさしむべく、時に理法の抽出も必要、教科書の讀解等も順次になすべく、要は教材を適確に兒童の腦裡にうち込み、手答へある域に進ましめねばならぬ。最後應用の段にては、描圖、諸要素關係表の製作、假設旅行談等をなさしむべく、或は地理的問題の解決をなさしむるもよい。而し、こゝに注意すべきは、教授されたる事項が一知半解なるに拘はらず、應用の段にて彼是問題を提出せらるゝは、兒童等にとりては非常なる迷惑であるので、教授者が兒童の了解程度を知らざるは、實に教授をば蹉躓せしむるの甚しきものなる事を忘れてはならぬ。この故に吾人は、本科教授をば、ムツカシクする事を批難するものである、随分兒童の理解力をも究めず、又教材必要の程度をも知らずに、詰め込み主義の教授者がある甚だしきは、郷土地理、日本地理等は疎略にして、不用なる諸外國の地理等をば、材料豊富に詰め込み、教授者もある、地理教授は生徒の常識を高むとはカントの唱へたる言である、本科につきて重要な教材をば、よく復習せしめて、確實に記憶せしめ、之を活用して、常識

カントの
の言

たらしむる事が必要である。不用なる而も分らぬ教材をば記憶せしめても、こは遠からず忘れて仕舞ふ、忘れて結構であるが、心力の過勞と、並びに他の重要材料を逸去したるとは、教授の缺陷である、能く省くものは能く教ふるものであるとの格言は、本科材料に於て、特に其の適當なるを見る、教授者は大に注意すべきである。

第六 理科

一 教授の要旨

教則第七條に曰く

理科ハ通常ノ天然物及自然の現象ニ關スル知識ノ一斑ヲ得シメ其ノ相互及人世ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ兼テ觀察ヲ精密ニシ自然ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

とある、近時の文明は理科の恩恵に負ふ所實に多大なるものである。コメニウス時代には、理科は言語を教ふる爲めの方便の如き觀を以て、教授せられたるものであつたが、今や進みて、自然の統一的生活を理解せしむると、人類の開化事業を理解

せしむると。二要点に歸著し、更に之によりて人世の利用方面に關する活知識を得しむると、觀察力の修練、思考推究の興味を喚起し、自然の間に存する美妙を感得して美情の養成もなし得らることになる。

そもく自然及自然現象は、雜然として尨大變動、何等纏まりのなきもの、如くなくれども、學理の習得によつて自然の統一せるものなることを識得することができ、動物の種類は雜多である、而も多くの動物の間に互に共同生活が行はれてゐる、植物界もまた多くの植物の共同生活より成り立つてゐる、而して動植兩界、亦相互に關係し、且つ礦物界とも關係し、更に物理學上化學上の現象も關係してゐる。斯くの如くして、自然界は一個の統一的生活をなしてゐる、而して萬物の靈長たる人類も此の統一體の一部分である。即ち理科教授は、この自然の統一生活を理解せしめ、且つ自然に對する人類の位置、また人類は如何に自然を利用しつゝあるかを知らしむるものである。この趣旨を了解して本科教授を全うすべきである。彼の徒らに教材傳達のみに止まり、何等利用方面に注意せざる授業の如きは、本科の要旨に反したるものと言はねばならぬ。吾人は本科教授を參觀して、幾度か、教

授者にして、よく教授要旨を了解することの必要なるを感じたのである。教授の空談に流るは、本科教授にては特に大禁物である。観察力を養ふこと、推理し判断する心力の錬磨をなすことも本科教授にて務めねばならぬ、而も細心に正確にこの種精神作用を働かすべく注意すべきである。教材を提示すると伴いて、知覺を精密になし、記憶を喚起せしめ、類同異變の觀察を慎重にせしめ、以て或は歸納的推理或は演繹的推理をなさしめねばならぬ。單に教材を臚列し、筆記せしむるのみにては、本科教授を全うしたる者とはいへぬ。更に進みて自然界の整然たること且は其微妙なる構造、作用等を知らしめて、自然の美を賞し、之を愛好する情操の養成なども務むべきである。極めて有利に、且つ趣味ある本科をして、殺風景極まる教授にして仕舞ふものが多い、本科教授に従事するもの大に反省すべきである。

二 理科教材の選擇

教則第七條に曰く

尋常小學校ニ於テハ、植物、動物、礦物及自然ノ現象ニ就キ主トシテ兒童ノ目撃シ得ル事項ヲ授ケ特ニ重要ナル植物、動物、礦物名稱、形狀、効用及發育ノ大要ヲ知ラ

シメ又通常ノ物理上化學上ノ現象及人身生理ノ初步ヲ授クベシ。

高等小學校ニ於テハ、前項ニ準シ漸ク其程度ヲ進メ特ニ重要ナル元素及化合物簡易ナル器械ノ構造、作用、人身ノ生理衛生ノ大要ヲ授ケ兼テ植物、動物、礦物ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシムベシ。

理科ニ於テハ務メテ農事、水産、工業家事等ニ適切ナル事項ヲ授ケ特ニ植物、動物等ニ就キ教授スル際ニハ之ヲ以テ製スル重要ナル加工品ノ製法、效用等ノ概略ヲ知ラシムベシ。

本科の教材は通常の動植物、礦物、人身生理、衛生及び自然現象等にて、其範圍は頗る廣大である。而も、これらは博物、物理、化學、生理等各科に分ちて教授するものでなく、統一的連關的に教へねばならぬ、それ故教材の選擇及排列につきて大に注意する必要がある。理科教授書は編纂せられてあるが、之にのみ據るべきでない。本科の目的としては前にも述べし通り、自然物並びに自然現象を根據として、觀察力を養ひ、實質的の知識を與ふるにある。又理化學の教材の如きも、土地によりて幾分特殊のものを教へねばならぬ、況んや自然物、自然現象は、土地によつて相異がある

ので、國定教科書の順序にのみ據つては、本科の目的を達することができない場合もある。故に教科書を適宜活用しなければならぬ。されば文部省に於ても適宜に教材を取捨變更せよとて許してある、この故に、本科教材の選擇排列は、教授者の手腕に俟つべき點が多々ある、各學校に於ては、讀本中に表はれたる理科教材理科教科書の教材、其郷土に存在する教材等につきて、慎重なる研究をして、教材をば大略選定なし置くべく、而も年々の教授に省みて、教材の加除をなし、精選にも精選を加へねばならぬ。

自然物及び自然現象の學習には、個々の物體及び現象を知ること、之を分類して系統を作ること、又是れ等の間に行はるゝ理法を知ることの三要件がある。動植礦物の教授にては、前の二者を重んじ、理化的現象に於ては後者を主とする、然し何れの教授にても人生に及ぼす影響及び、利用法等を知らしめねばならぬ。されども前にも記したる通り、教材の選擇こそ最初の關門である、教材當を得ずば、本科の目的を充分に達するとは出來ぬ、左に教材選擇上の標準二三を記す事とする。

理科教材
選擇上の
注意

如きは避けねばならぬ。

ろ、教材は、成るべく兒童の目撃し得る範圍より選擇して、實物實事に依りて教授するがよい、たゞ是等の材料を得ること難き場合に限り、標本模型圖書等を採用すべきである。

は、自然物に於ける教材は、全群の代表となるべきもの、即ち模型的のものを授くべきである。又其他最もよく自然の法則を示せるもの等につきて、務めて、之を生活の共存體に於て之を求め、以て相互依存の關係を明らかならしむべきである。

に、自然現象につきては時々發生する現象より始め、或る現象の標準たるものを選び、原因結果の律によりて論理的に排列するがよい、而して其法則を應用したる實際生活の状態に及ぶやうにすべきである。

ほ、人間生活に重要な關係ある教材を選擇するがよい、即ち人生に利益を與ふべき教材である、家事、農事、水産、工業等に利用すべきものは勿論、亦有害動物、有毒植物、有毒瓦斯等につきては教授すべきである。

へ、教材の選擇は季節、及土地の狀況によりて特に注意すべく、之が排列も又之に據らねばならぬ。

三 理科教授の順序

『理科ヲ授クルニハ成ルベク實地ノ觀察ニ基キ若ハ標本模型圖書等ヲ示シ又ハ簡單ナル實驗ヲ施シ明瞭ニ理會セシメンコトヲ要ス』とは教則に規定せられたる教授上の明文である。この觀察と實驗、これ理科教授に於て極めて大切なことである。これに據らずば本科教授は決して効果を奏さない、觀察とは日常の經驗を直ちに取りて、教授の資料とする、而も之が爲めに殊更に意を留めて直觀せしむることもある、即ち實地に臨み、實物に就きて觀察せしむることもあり、標本、模型、圖書等を觀察せしむることもある、更に之がために校外教授をも行ふことあるべく、兒童各自に隨意觀察せしむることもあるべく、又は學校園、農園等につきて指導することもある。これらの觀察は、精確なる説明と、巧妙なる圖解と、或は顯微鏡等の力によりて全うせなければならぬ。

實驗は成るべく日常の器具を用ひて之を行ふやうにするがよい、複雑なる器械を

要するものは、器械裝置の爲めに妨げられて、其現象を理會せしむることの出來ない場合もある、之等は材料選擇の上よりも注意して、教授を簡明にする必要がある。又數學的證明を要するものは概して授けないがよい。實驗をなすには、簡明にして容易なるものを選ぶがよい、危険なる實驗は之を避くるか、若し止むを得ずして行ふときには、相當の注意をなすべきである。實驗の進行と共に、問答をもなすべく、或は説明をもなすべきである、而も實驗には精密周到なる準備が入用である、何れの教科にても準備は入念にして欲しい、然し其中にも理科教授は、細目、の、作、製、よ、り、初、め、て、教、案、教、具、の、順、序、等、準、備、と、い、ふ、こ、と、に、餘、程、の、力、を、注、が、ね、ば、ならぬ、之を怠らんか、本科教授は誠にツマラなきものと化す。其實験を終りたる後には、標本器械等は清淨に掃拭し、元形に組み立て、又一定の所に納むるやうにするがよい。

以下本科教授の順序につきて大體を記述する。

(一) 博物教授

博物的材料の取扱は、主として實地の觀察に基づき、又は實驗を併せ用ひて、個々の

物體及び生活團體に關して明瞭なる觀念を得しむるのである、今教授の順序につき大要を記す、第一豫備である。内容を明らかにして目的指示をする、而して舊觀念の分解整理をするのである、自然物につきての事實を授くることの主たる場合には其事實を理會せしむるに足るべき、兒童既有的の觀念を喚起する、若し既知の事實に基づき分類又は理法を授くるを目的とする場合には、既知の動植物等より材料を喚起するのである。次は提示である、實物標本、模型、圖書等を示し、又は實地を踏査せしめて、推究的に問答を行ふ。而も其問答たるや、順序正しく行はねばならぬ。其提示法たる先づ概観せしむることをなし、次に形體の觀察説明に及び、更に生活狀態の説明をもなすべく、尙ほ進んで推究的に問答をなし、成るべく兒童自身をして其關係を發見せしめ、知識を明瞭ならしめ、且其觀察せるところ、推究せるところにつき順序正しく言語に發表せしむるがよい。提示の段には既知事項と比較して、歸納的に分類せしめ、或は理法概念を抽出せしむることもある、又教授の進行に伴ひ板書せる文字を筆記せしめ、若くは教科書の講讀をもなさしむべきである。次は應用である。同一類屬の他の物體を挙げしめ、或は實物を示して、之が類

屬を判斷せしめ、又は日常遭遇せる事實を判斷せしめ、或は動植物の培養、採集等を實地に行はしむるのである。

(二) 理化教授

豫備、教授、應用の三段階にて教授するのである。こは大體何れの教科の教授にても同じであるが、特に理科にては多くは比較し、總括する必要ある故教授の段をば三段階に分ちて、提示比較、總括となし、通じて五段階として教授するがよい。

第一豫備にて、目的指示をなし、兒童平素經驗せる自然現象、日々の生活、既知の器械等に就きて新授の材料に最も關係ある舊觀念を分解整理する、次には教授の段となる、特に注意すべき要點を豫め指示し置き、實地に就き又は實驗によりて提示を開始する、其進行中に説明をもなすべく、要點發見をもなさしむべく、又實驗の結果につきては問答する、言ふまでもなく、本科教授は系統正しく進行を圖るべく、比較の如き最も明瞭になすべく、幾多の事物、現象と比較して、雜然たる教授をなすこと往々これあり、特に博物教授に於て然り、同時に二物以上のものを比較するは不可、又板書文字の如き、簡潔がよい、説明の言語も明確にて論理的なるがよろしい、尙ほ

總括の段にては法則を導き出し言語にて表出せしむるのである。筆記せしめ教科書を講讀せしむることも、適當の時機に行ふ、最後の應用にては、日常遭遇する事實の判斷をなさしむることもあり、問題を與へて解釋せしむることもあり、或は實物模型、圖畫等を工夫せしむることもあり、實地に利用すること、他教科に應用することなども注意して行ふべきである。

以上は理科教授順序の一例である、實際教授に臨みては、尙ほ幾多の順序方法がある、教授者は材料に應じて工夫し研究する所あつて然るべきである。尙ほ参考のため教育研究第九十七號紙上にて棚橋源太郎氏の述べられたる、歐米に於ける小學理科教授と題する意見の概要を摘載する。

A 小學校下級理科教授

歐米を通じて初學年から課せられ、高學年に進むに隨つて分化して往つて居ります。高師附屬小學校の教則には觀察科及郷土科といふものがあつて、其一節として理科を課して居るがこれと大差なしであります、そして歐米の理科に配當した時數も概して我邦よりも多い様であります。

棚橋氏の
理科教授の
上意見

獨逸に於ける觀察教授では一般に掛圖を用ひて掛圖が常に教授の中心と成つて居る。

けれども戶外に生徒を引率して又は動物園に連れ込んで實物を見せること所謂學校散歩は、相當によく行はれて居ります。

英米の理科初歩教授では、實物を使用することが、一般に多い様に思はれる、教室の窓の處には多數の植物の鉢植や水族器が並べてあります。又學校園も立派なものがあつて觀察教授との聯絡がよく取られて居るようであります。

B 小學校上級理科教授

小學校上級の物理化學教授を見て特に感じた事は、其やり方が著しく論理的學問的であることであります。

最近に至つては授けた智識を確實にする爲に、普通教室なり細工場なりで種々の材料を用ひて、之れを形に現はし製作させて見るがよい、いや其智識を授くる前に當つて、生徒自らをして實驗觀察をさせて自ら發見し自ら決定し自ら學ばしむるかよいといふ様な説が盛になつて來て、其主張を實地に試みられる事になつて來

た、前者は作業教授主義者の主張で後者は發見的教授法とでも申しませう。發見主義の方法は獨逸よりも英國の方で先きに發達したもので、多くは特別の生徒の實驗室を設けて居る、獨逸で近來盛にこの方法を導き入れて居ります、それは主として英米の影響であります。

英國で私が見た様子を申すと……其教授に先きだつて生徒に先づ自ら實驗させるのであります。生徒自らをして實驗觀察して物の性質を確め、定義を作製させ、理化學的、生物學的、法則理法を歸納し發見せしむるのである。即發見的觀察的に實驗せしむるのであります。そして、其實験で測定し決定した事項は直ちに其ノートブックに概要を記入させるのでそれが教科書の用をするのであります。歐米小學校の理科教授は、下級及上級とも特色を發揮して居ることが分る、我國の理科教授は、此際大に改善の方途を講究すべきである、尙ほ本章を終るに當りて、現時理科教授につきての缺點を述べて斯道の反省を求むることとする。左は京都府師範學校附屬小學校にて、教育界紙上に發表せる『理科教授上の通弊』中、教授方法に就ての弊と認むべきものである。

『前略』

1、準備不十分

- A、兒童各自をして豫め觀察せしめ置くこと少し。
- B、適當なる準備を缺くことあり。
- C、教授に要する標本器械を製作工夫すること少し。
- D、準備室の不備、及び器械室の不整頓なること。
- E、觀察に適當なる實物標本、繪畫の備少く、且つ必要なる箇數を缺くことあり。
- F、比較的不適當なる繪畫、標本、器械の類多く却て必要なるもの、不備なること及び此等を十分利用せざることあり。

2、説明方法の不當

- A、生態學的及其共存體の一部として説明不足すること多し。博物教材を授くるに當り形態、習性等を無趣味に説明するも、生態に關する理法を解くこと少く又之を解くも生態的統一したる自然を説か

す即ち共存體の一物を取離して個々の別物の如く説明し終ること多し。

B、生態との説明に連絡を缺き、之れが爲め時間を浪費することあり。

又生態學的説明をなすも形態のみを話し後生態に關することを話し相互の離るべからざる關係を説かず、又之れを説くも相離れて説明するがため再び前者を繰り返すの必要を生じ、時間を浪費することあり。

C、科學的に傾き易く通俗的、實用方面を缺くことあり。

3、直觀の方法不十分

A、小さきものを遠望に止むることあり。

B、机間を巡るや早きに過ぐるものあり。

C、説話中に廻覽せしめて、兒童の注意を錯亂せしむることあり。

D、直觀及實驗の機會を誤ることあり。

E、直觀の指導宜しきを得ざることあり。

F、自動的の直觀、及び實驗の少きものあり。

尙ほ此外校外教授の弊として

A、校外教授の機會を逸し、又時期の不適當なることあり。

B、教師の豫案の不精密

時間、距離、場所等の調査生徒の準備、教授の方法に關する案等不精密に
なし、漫然と校外に引率することあり。

C、管理の不充充分なることあり。

D、偶發の所置に巧みならず。

『以下略』

第七 技能科及實業科

技能科及實業科の教授は、近時我が教育界の上下を通じて之が改善に腐心して居る、抑々この種の教科は、筋肉活動及實地應用を主とするものにて、彼の心意活動及理論を主とするところの知識的教科と相待ちて、心身の調和的發達上大なる効果がある、特に意志の鍛鍊といひ、勤勞の習慣を養ふこと、實用に關する點多きこと、利

前學年の基礎を重んずるべき
技能教授の要點

用厚生に直接効果あること等は、この種教科の價值として認めらるゝ所にて、世界の大勢に徴するも、又我國狀に照らすも、この種教科の教授を完成する必要がある。技能科とは、圖畫、唱歌、體操、裁縫、手工等をいふ、此内裁縫手工の二科は餘程實業的色彩を帯びたる教科である。この種の教科は、小學校に於て、或は初學年より課するもあり、或は相當の學年に進みたる時に課するもある、終學年、即尋常五學年頃には兎に角各種技能をば餘程習得したる勘定である、假令ば圖畫の如き、唱歌の如き體操といひ、裁縫といひ、手工といひ、前學年までにて、ある程度までは教授を受けてゐる、されば終學年教授は前學年までに於ける舊知識を基礎として著手すべきである。即ち或は前學年までに識得せる教材をば、補習の意味に於て又は大成するの決心にて、教授をなすべきである。各學年配當の教材こそ相異あれ、前學年の基礎の上に立ちたる教授を爲すことを等閑視してはならぬ。次に技能教授の要點を述べんに、教授法は材料によりて、相異するところあつて然るべしであるが、教師の示範を第一とするのである、教師は其技に堪能にして兒童の前にて畫くところ、歌ふところ、將た演技製作等に於て模範とするに足るところ

の技を發揮せねばならぬ。巧妙なる示範は眞に有力なる教授法である。然れどもこゝに注意すべきことがある、單に技能に巧者なるを以て唯一の示範とすべからざることである、其最も大切なるは、教師の眞面目にして、自ら勤勞するを以て、神聖なりとするの意氣である、この意氣ありてこそ、巧妙なる示範をして、千金の價值あらしむるのである。輕薄なる思念に驅られたる技能教授は、よし演技其ものは巧妙なりとも、教育上半文錢の評価もないものである。次に技能教授には、反覆練習を重んずることである、終學年の教授には、前學年にて習得せる技能等を再演せしむる場合が多くある。其必要なるものにつきては、練習を獎勵するがよい、兒童自らをして練習を重んずるやう指導するは、技能教授に於ては重要なことである、次には、批評の方法である、こは教授に附帶して研究すべく、批評の宜しきを得るは、有效なる教授法である、技能を練習するに興味を持たしむるも、批評の方法如何にあるので、之につきては、共通の缺點短所を矯正することもあるが、なるべく個人教授をなすのである、各個人につきて教授力を賦與し、兒童を獎勵するがよい、終學年期の兒童にして、何れの技能にせよ不成績なるものあるは、すでに初學年及び

中學年期の教授がよろしからざりしに原因することであるが、よし前學年時代の教授は如何なるものなりしにせよ、終學年期の教授は親切に指導するに、あることを忘れてはならぬ。彼等は遅かれ早かれ一兩年にて卒業するものである、技能の拙なるは親切丁寧に指導せねばならぬ、其巧者なる點は賞讃してやるがよい、凡そ彼等をして自得せしむることは教授方法上の一秘術である。

技能科の教授法につきて、一々其方法を述ぶるは、徒らに繁冗に渉るの嫌ひあるを以て之を略し、以下各教科につきて教授上の卑見を述ぶることとする。

一 圖畫科

教則の要求するところは、圖畫は通常の形體を看取し、正しく之を畫くの能を得しめ兼て美觀を養ふべしとある。今日のところ、本科教授の如き充分なる効果を奏してはゐない、勿論展覽會等に陳列せるものは、何れも各學校の優等兒童の成績品であるらしい、數十人の學童中には、數人の高能兒童の成績品が選拔せらるゝやうである、大部分は誠に「マヅイ」結果である。「通常の形體を看取し、正しく之を畫くの能を得しめ」とあるが、尋常卒業兒童に向つて、手本なしに實物寫生を命じたところ

圖畫教授
の成績

ろが甚だ覺束ないところがある。卒業生の多くが卒業後に於て、其學校の圖畫科より得たるものをば、どれだけ實際生活に應用し得らるゝであらうか、實際多くの小學校の成績によつて判するに、たゞ教科用の手本を見て畫くことを得る位に過ぎぬのである、兒童の多くは手本を見ては眞似る、而し其眞似方は如何にも「マヅイ」そこにもこゝにも塗抹したる跡のみにて、美感養成だの清潔綿密だのといふことは何れの點にも認められぬものもある。一體技能科の如きは、其人の器用にも因るので、一概に論斷することは出来ぬが、教授法の上に於て工夫すべき點が少からずあることと思ふ。

兒童の成績品を案するに、教科書の畫を眞似たるもののみ多くして、應用的、實用的、ものが少いのである。實際兒童に向つて日用品の簡單なるものを畫かしむるも書くことができないものがある、終學年の圖畫教授は、兒童をして手本以外に應用ができるやうに指導ありたい。何も精巧なる圖畫を畫かしむる必要はない、簡單でよい、要領を會得せしめて、見たるもの、聽きたるもの、或は想像したるものが不十分ながらも畫として直ちに發表できるやうに教授ありたい、左に記せるは教

育界第七卷第九號社説中の一節を抄録したるものである。本科教授上参考とするに足る有力なる説である。

英國兒童
の圖畫

英國兒童の圖畫を観て感あり

英國兒童の描ける圖畫を或所にて見たが畫ける所のものは、極めて簡單である、之を我國小學兒童の高尙なる人物を畫き、又は複雑なる山水花鳥の類を寫したるものと比ぶれば大なる相異がある。

彼の兒童の描く所は簡單であるが、一たび筆を下して其實物を寫すや、極めて精確にして、極めて眞面目で如何に精密に觀察し如何に能く注意したかを知るこゝとが出来来る。加之一旦之を寫生するや直に意匠を加へて應用的圖案畫を構成し無責任の書寫しをしない此の如き實に頼母しき成績品である。

之に反して我國の兒童が畫けるものは徒に高尙なる人物畫や複雑なる山水花鳥の類など多けれど、充分熟したるにもあらず、さらばとて簡易なる單形物すらも臨本を離れては十分に運用が叶はず、蛇蜂取らずの嘆がある。

されば徒らに高尙複雑の圖畫を描かしむるよりは、寧ろ簡單輕易の物體を寫さ

唱歌教授
の缺點

しめ十分に觀察を密にするの習慣と事物を正確に畫き出すの美風に馴れしめたいのである。云々

二 唱歌科

唱歌は平易なる歌曲を唱ふることを得しめ、兼て美感を養ひ、徳性の涵養に資するを以て要旨とす。とは教則の要求するところである、蓋し唱歌は、兒童の自然的嗜好に基づけるものにして、其方法宜しきを得ば、美感養成のみか、道徳的性格の陶冶も出来るのである、この點に於て本科は修身科と密接に關係してゐる。其歌曲を唱ふることの習練によりて、聽覺の發達、發聲機の練習も期待し得らるゝのである、さて我が小學校の實際に於ける多くの唱歌教授は、よく教則の趣意を達すること、に努めつゝ、ありやの疑問に對する吾人の解決は、否定より外にないのである。吾人は小學校の唱歌教授をば幾度か參觀したのである、殊に高學年兒童の教授をも見た、兒童の多くがたゞ樂器の音と、教師の強要する音聲とのために促迫せられて、忌々ながら耻かしさうの面色にて歌つてゐるのである、自發的に愉快に歌ふのではない、苦しさに受動的に歌つてゐる、其上級生の如きは思ひきつて活潑に歌は

ぬ、音聲も肺臓より出ない、姿勢も正しくない、多くの兒童が前席の兒童の蔭に身を屈するやうにして、面耻かし氣に歌つてゐるのである、否歌ふのではない、唸るのである、美感を感じてゐるのではなくて、苦痛を感じてゐる、甚だしきものは早く時間の経過せんことを冀望してゐる、徳性の涵養どころか、却て裏面には醜惡なる感情が醸成されつゝある。

一體我國小學校の唱歌教材は各學年につきて適當に選擇せられ、且つ排列せられつゝあるかといふに、吾人は遺憾ながら之も否と答へなければならぬ。唱歌の教材とすべき者は多くある、何々唱歌集とか何々唱歌とかいろ／＼あるらしい、この中より各教師が思ひ／＼に選擇して教授する、否各學校にてはそれ／＼教材選擇に注意しては居るが、それが兒童に適切なりや、否や、こは甚だ疑問である。殊にこの科は教師の技能に大なる關係もあり、又教師の嗜好如何によりて兒童に對する本科の價值を縮減せる向も少くはない唱歌に不得手なる教師は、熱心に教授しない、又嗜好の偏せる教授者は得手勝手の唱歌など教へて居る、兒童等はたゞ歌はせらるゝばかりで、本科に對する眞正の興味は起らぬ。それ故に尋常五學年頃の兒

唱歌教材
につきて

童になつても中には満足に歌ひ得らるる唱歌は一つもない、よし歌ひはしても何のことやら分らぬものがある、されば美感の養成も徳性の涵養もそつち除けにて兒童等は不用學科の景物でも貰ふやうの積りにてガヤ／＼と當座の時間だけを送るのである、斯くの如きは決して本科教授の本旨ではない。斯く書し來りて、現今教育の研究(小西重直氏著)を繙くに偶々左の記事が眼についた。

『前略』吾人若し其感動の度を高むるときは、其唱歌の拍子に連れて動作を起すことを禁ずる能はざるに至ることあり、是れ唱歌教授上、其曲目歌詞に留意せざるべからざる所以にして、國民の状態を考察し、其長を伸ばし其短を補ふ方針を以て歌詞曲目を作らざるべからざるは論を俟たざるなり。獨逸の如きは、此點に於て世界に類を見ざる進歩を呈し、我國の現状より見れば、實に羨望に堪へざるものあり。小學校の教材の如きは、各學年、其國民感情の陶冶に關する、若干の歌曲歌詞に對しては、永く變化を加へず、永遠に國民性の陶冶に資しつゝあり、教授に於ても之れに重きを置き、生徒をして充分に誦誦せしめ、事に觸れて、自然に歌ひ得るに至らしむ、斯くして老人も父母も子女も社會の人々も皆盡く同一の

獨逸の唱
歌教授

若干の唱歌を歌ひ得るを以て、彼等國民の感情は此間に自然融和統一する機會少からず、子女の歌ふものは父母之を知らず、父母の歌ふものは老人之を解せず、隣人の歌ふもの吾人此を知らざる場合には、唱歌によりて國民の感情は到底完全に統一せらるゝことを得ず。下略

小學校の唱歌は國民性の陶冶に資するところあらねばならぬ、單に唱歌に對する自發的の興味を養ふ位では物足らぬのである、而し我唱歌教授に於ては、兒童が本科に對する興味は前に記したる通りである、自發的の興味を以て本科に對することすら覺束ない、況んや國民性の陶冶などの段に進まんには前途瞭遠である。吾人は永遠に互りて誦するに足る國民的歌詞を要望する。勿論君が代の唱歌其他祝祭日等の式日の唱歌は全國共通であるが、この外に國民性を養ふに足る幾多の唱歌をば全國小學校の兒童に歌はしめたいと思ふ、小學校の卒業兒童の如きは學校にて教授せられたる唱歌をば永く歌ひ得らるゝやうに練習し置きたい、斯の點につき根本より研究する必要があると思ふ。

三 體操科

體操科の 要旨

「體操は身體の各部を均齊に發育せしめ、四肢の動作を機敏ならしめ、以て全身の健康を保護増進し、精神を快活にして剛毅ならしめ、兼て規律を守り、協同を尙ぶの習慣を養ふを以て要旨とす」とは、教則の指示するところである。本科は第一に身體上の效力の目的とするので、身體は體操によりて能く發達するのである、別して各部を均齊に發育するは體操特殊の效力である。而して能く健康と強壯とを進め、容姿を美ならしめ、四肢の運動を機敏ならしむる等、身體上の効果は大なる者である。其特に精神上に及ぼす效力は、精神の快活を増進すること、竝に剛毅なる思想の養成である。尙ほ規律に服するの精神、協同を尙ぶの習慣等も本科に於て養ふことができる。又高學年に於ては、男子には兵式體操を課することになつてゐる、この體操は兵士の訓練と同様になすべきものではない、こは言ふまでもないが、剛毅の氣象を養ひ、規律に服するの習慣を與へ、將來兵士となるべき基礎的練習を得しむるものである、兒童身體の發達程度に應じて、この趣旨の貫徹せんことをも計らねばならぬ。されば本科が普通教育上重要な地位にあることも自然に納得することができるのである。

さて教育上體育の必要なることは年一年と唱導せられて、従つて體操教授につきても其筋に於ける研究的指導といひ、且又實地教育家も、他教科に劣らず、本科を研究しつゝあるもので、稍良好なる成績に向ひつゝあるものゝ、未だ以て相當の成績といふまでに進まないやうである。教授者たるものが本科の精神を十分に了解せざるあり、従つて本科に關する技術に拙なるものあり、其拙なるは致方なしとするも甚だしきは、本科にて教授すべき技術其物を知らざるものもある、最も甚だしきは、極めて舊式の體操をなせるものあり、誤りたる技術を教ふる向もある、斯の如き故に教授者たるものが一向に、本科に對する精神が充實しない、舉止不活潑、號令緩漫、規律雜然たる教授が多い、而も體操科の時間だけはどうかやう姿勢を正すものゝ、それ以外は之を構はない、されば身體各部に對する均齊の發育といひ、四肢の動作を機敏にすといひ、全身健康の保護増進、さては精神方面の修養の如きは誠に不出來である、體操時間は腕白兒童をますゝ腕白ならしむる如き教授もないではない、其特に終學年兒童の如き、體操科の教授をば、年々受けるに拘はらず、技能練習の不足なるが故か、或は教授法の不完全なるが故か、不規律不整頓なる上に、其技能の

拙なる驚くべきものもある。上級兒童は身體の發達といひ、各部の均齊的發育といひ、又四肢の運動の機敏なること、精神方面の修養なども見るべきものがなければならぬ、すでに在學數ヶ年を経たる兒童である、この間に於ける本科教授の効力が必ず表はれねばならぬのである、而も往々上學年に進みたる兒童にして、不規律なるもの多く、又姿勢の悪しきもの、健康の如何はしきもの、四肢の動作機敏を缺けるもの等が少くない、或は體操の教授を嫌忌するもの、遊戯に興味を持たぬもの等數へ來れば面白からぬ現象が澤山ある。

精神の乗らない體操は、たゞ形式的に手足を動かすばかりで何の効果もない、外形を美しく揃へて、他人に見せるを以て目的とするものならば、それでもよいかも知れぬ、苟も體育の目的を達せんとするには、精神的に演技せしめねばならぬ、一舉手一投足も眞に之をなさんと決意して眞面目に従事することこそ、本科の目的に到達するものである。今の體操教授は實際精神的鍛鍊が缺乏してゐる、それ故に上級生となりても體育の効果が擧がらぬのである、卒業しても體操教授の價値が一向に表はれず、體育につきての興味など起つてゐない。吾人は終學年期の兒童等に對す

る、今、一層、體操、教授の、研究を、希望する、彼等、の、卒業後、の、體育、まで、を、も、左右、する、に、足る、技術、を、ば、教授、して、之を、練習し、十分に、練熟、せしめ、置き、各個人、家庭、に、於て、も、練習すべく、又は、一郷、の、卒業生、同志、集合、して、演技、も、出來、る、やうに、訓練、して、置きたい、と思ふ。體育に、關する、鍛鍊、不十分、なる、故か、卒業後、下等、の、愆情、に、耽る、もの、或は、神經衰弱、に、陥れる、青年、が、少く、はない、學校、の、體育、が、卒業後、の、兒童、に、までも、效果、を、及ぼさぬ、やうな、薄弱、なる、ものでは、之を、課したる、趣旨、に、背反、すること、と思ふ、のである。

四 裁縫科

教則には裁縫科の要旨につきて左の如く記しある、曰く

裁縫ハ通常ノ衣類ノ縫ヒ方及裁チ方等ニ習熟セシメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

蓋し裁縫教授は獨り通常の衣服を裁縫する技能に熟達せしむるのみならず之と同時に眼と手とを練習し又事物に對して綿密、勤勉、清潔、整頓及び節約利用の習慣を養成するを以て目的とする、我國古來女子の學ぶべき唯一の技能として何れの家庭にても之を習得せしむることに重きを置きたるものにして、今日にても女子

裁縫科の
要旨

裁縫科の
研究不十分

裁縫科の
教材

教育上優に其位置を保有してゐる。さて小學校にては尋常三學年よりして特に女子のために之を課することになつてゐる、本科の如き、女子のためには、極めて必要缺くべからざるものなれば、女子教育の一面よりも特殊の研究をなすべく、又普通教育の立場よりも研究すべきものである。而も之に關する研究の微々たるは遺憾の至りである、小學校の如きも、女子に對する各教科の研究をば兎角冷淡にする氣味あり、其女子のみの學校にても、又之が研究に十分なる熱誠をば盡さぬやうの傾がある、従つて大切なる本科教授が、一向に效果を發揮せず、女生徒あるがため申し譯だけに課して居るといふやうな鹽梅である、吾人は本科のために大に悲むものである。

本科教材は特に土地の狀況に顧み、實際生活に必要な事項のみを精選し、成るべく其材料を少くして十分に練習せしむるやうにしたい。教則第十一條中には「裁縫は其材料を日常所用のものに取り、之を授くる際、用具の使用方、材料の品類、性質及衣類の保存方、洗濯方等を教示すべし」とある、土地の狀況を視察して、其材料にせよ、裁縫の種類にせよ、適切なるものを教授するやうにすべきである、この點につき

ては家庭とも十分に協議を遂げ置く必要がある、注意深き學校にては各前學期の終りに教材を家庭に通知し置き、實地に裁縫する一週間前に兒童に之を持參すべきことを命じ、期日までに調ふるやうにする向もある、斯くせば家庭にても材料につきて相當の準備も出来る譯である、其不注意なる教師は、材料などにつきての注意は極めて無頓著にして、而も突然明日何々の品を購求し來れなど、命ずるものがある、父兄の迷惑は一通りではない。

教材の選擇といひ、排列といひ、何れも兒童心身の發達、殊に手指の熟練に順應すべく、又四季の推移にも注意し、尙ほ他教科特に圖畫、理科、地理等の教材とも聯絡をつけて、決定するがよい、高學年兒童に對しては、特に個人教授をなし實力を附與することに力を注がねばならぬ。而も本科は姿勢態度等に特に注意する必要がある、教授中往々雜談するものを見受くるのであるが、終學年期に達したる兒童等には作法正しくして綿密に丁寧到手際よく仕立つるやうに習慣を附與したい、又學校によつては高學年兒童に、小細工物を多く課して、普通の衣類の裁縫をば等閑にせる向もある、こは餘り賞すべきことでない、普通衣類の裁縫が不熟練にて、餘計なる

裁縫教授
の現状と
希望

小細工物が出来たからとて、實際上の効果は少ないのである。又中には小切糸屑等の始末に注意せず、又針を粗末にするものなどに何等注意を與へぬ教師もある、高等校を卒業したる兒童にして通常衣類の繕ひ方を知らぬもの、保存法、整理法等につき何等の知識がないものもある。こは必ず教授すべきである、其他洗張、色揚げ等につきても教授して置きたい。何事も機敏に仕上ぐるの習慣をも養ふがよい、これらの點につき目下の裁縫教授は大に到らざる點がある。吾人は切に實際家の研究を要望するものである。

五 手工科

教則第十二條に曰く『手工ハ簡易ナル物品ヲ製作スルノ能ヲ得シメ勤勞ヲ好ムノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス』と、簡易なる物品の製作をなし得るは誰しも必要なことにて、何品と言はず、簡易なる物は、製作修補が出来るやうの技能を欲しい。凡そ小學校の手工は、技能陶冶の爲めに課するものにして、職業的性質に偏してはならないのである。而も物品製作の技能は、從來工業に従事する者に取りては其準備たり得るが故、工業地方の手工教授の如きは、餘程特色あるものでなければなら

手工科の
要旨

ぬ。

物品を製作する技能を收得することは、眼及び手指の習練に與つて力あり、尙ほ理科數學の應用ともなるべく、延いては生活上家事上利益する所が多いのである。特に精神的方面の利よりいへば、形體の觀念、物質の知識、職業の理會之なり、筋覺、觸覺の鍊磨、及び工夫想像の力をも養ふことができ、尙ほ審美の情、實業を好愛するの念、及び勤勞を好むの習慣をも養成することができ、斯くの如き多大なる價值あるを以て、本科の教授は、近來大に注意せられつゝあるので、各小學校に於て之を課すると共に、教材及び教授法につきても、相當に研究するやうになつてゐる、然し本科の成績に至つては、遺憾の點が少からずある。

其遺憾の點といふのは色々あることであるが、先づ教授者の修養到らざるところあるが故か、教材の選擇にせよ、教授方法にせよ、實際的でないことである、即ち土地の狀況などを無視せるのみか、教則の要旨の一部分さへも貫徹し得ざるものが多い。現時は幾分注意するやうになつて居るが、曾ては手工の教授細目などを其校に適するやうに作り得ずして、他校の細目を全然模倣し、或は書物雜誌上の所説其

手工教授
上の缺點

まゝを襲用し、教授法とても順序を踏まずして、勝手に指導をなしたものであつた。手工教授は何のために課せられつゝあるか、教授者よく了解せず、兒童等は、イタヅラ仕事を公然と許されたるが如き氣取りにて、紙を剪み切り、小刀で机腰掛を削り、或は粘土にて手足顔等を塗抹し、爲めに手工教室内は百鬼夜行の修羅場たるの觀を呈したともあつた、されば父兄等は本科の趣旨の納得が出来やう筈がない、況んや價值などにつきては毛頭分らないので、却て厄介なることを教ふるもの哉とて批難するものさへあつた。

本科の成績を案するに、終學年になりても、教授されたる事の活用は一向に出來ずして、たい教師の爲すことを模倣するのみのものが多い、即ち工夫製作といふことが出來ないのである。こは指導法の不完全なるが故である、特に或る品物の製作につき、基本的の練習が不十分なるに拘はらず、急に他の品の製作に従事せしめ、轉何等關係もなき他物品の製作を強ふるのである、兒童等は落ち付きて工夫製作するの餘地がない、斯くて本科成績も不結果に終ることが多い、曾て文部省視學委員岡山秀吉氏が、長野新潟兩縣の手工教授を視察して、其筋に報告したる復命書を

本科の成
績につき

見るに、手工教授につき注意すべき點が多々ある、参考のため其中の二三項を左に
掲載する。

『前略』

○工夫製作を多くすべし

教授細目に徴し且つ教授の實況に就きて見るに、現今手工教授の大勢は物品の
製作方法を教へ込むに急にして、生徒自らをして工夫創作せしむること極めて稀
なるが如し、今回視察せし二十六箇學級の授業中二三を除くの外は殆ど皆模倣
的注入的の教授なりき、即ち孰も教師自己の豫定せし製作の順序方法を單に
生徒に模倣せしむるに在りき、素より此は手工教授上必要なる一の教法にして、
且つ新奇なる工具の使用練習或は工作法の基礎的練習等に於ては、此の教法に
依りて嚴格なる規律の下に教師の模範に倣ひて作業せしむる事必要なりと雖
も、而も兒童の漸く使用工具の用法及某種製作の基礎的方法に習得するに及び
ては又時々兒童自らをして或は自己の希望せる製品を選定せしめ、或は教師の
指定せる教授題目の下に自己の意匠工夫を實地に發表せしめ、以て此等心的作

用の發達を促さるべからず、此は實に製作に對する根本力の養成たるのみな
らず又心意鍛錬の良法にして現今の教科案上、手工科を見るに至りし所以のも
の亦此に存するもの多きを信ず、但し此種の作業は兒童の動作區々にして彼の
注入的模倣的の教授に比すれば多少其指導及管理に困難を覺ゆるが如き場合
なきにあらずと雖も、教師にして相當の伎倆を有し適當に之を誘導啓發する所
あらんには、其は兒童に一層深厚なる興味を興へて能く彼等を鼓舞し、其作業上
に非常なる奮勵努力を用ひしむるに至らんこと、予が經驗に徴し信じて疑はざ
る所なり。

○説明の時間を短くし實習の時間を長くすべし

手工は物品を製作するの能を得しめ勤勞を好むの習慣を養ふを以て要旨とし、
従て生徒の活動を專とすべき學科たるを素より論なし、されば模倣と製作なる
とを問はず製作に際して爲す所の説明或は問答の如きは成るべく簡單明瞭に
少時間に於て之を終へ、其觀念を製品に發表せしむべき實習には成るべく多く
の時間を用ひしむる如く爲さるべからず、然るに今回視察したる授業の多く

は事之に反し、説明或は問答に多くの時間を費し、甚しきに至りては其授業の目的の實習に在りしに拘らず漸く兒童をして材料工具に手を觸れしめたるのみにて既に時限の鐘號を聞きたるさへありき、斯の如く教師の活動的にして生徒の受動的なる教授は、他の知識的教科に於ては或は恕すべけんも手工の如き技能的教科に於ては斷じて之を禁せざるべからず、さればとて製作に必要な觀念を明瞭ならしめずして製作に著手せしめんか、是れ又種々の混雜を生じて到底教授の目的を達し得べきにあらず、故に製作前に於て爲さんとする説明或は問答に關しては豫め充分に其内容を精選し、順序を定め、且つ標本或は掛圖等を利用し、以て迅速に其要領を收得せしむるの工夫あらんことを望む。

○成るべく標本及掛圖を利用すべし

本科教授に於て製作せしむべき物品の形狀構造等を敏活明瞭に知らしむる最も有效なる手段は、實物標本を示すに在るや素より論を竣たざることにして、之に反し何等直觀の方便を用ひず只單に長々しき談話を爲すが如きは迂遠の甚しきものと謂はざるを得ず、但し其標本は教室内の何れより望むも明に看取し

得べきものにあらざれば良く其目的を貫徹し得ざるべきを以て成るべく大形のものたること必要なり、然るに今回の視察中に於ては必要に際し全く之を缺きて長々しき談話を爲したるもの或は之を用ひしも、其形餘り小に過ぎたるもの等遺憾に感せし場合甚だ多かりき。

又掛圖は製品の寸法剖展形製作の次第等、實物標本の及ばざる點を指示するに便なれば、標本と共に成るべく教師の勞力に依りて之を備ふるの要あり、是れ簡單なる圖は教授に際し直に板畫するを以て可とすれども、稍々複雑なるものに至りては爲に多くの時間を費し、大に教授の進捗を妨ぐるのみならず、其圖も亦多くは不完全なるを免れ難ければなり、而して之が増殖を計るの一法は時に應じ板畫する代に豫め教師自ら紙に描き置きて使用し、一旦使用したる後之を掛圖に製して他日のために保存するに在り、今回視察の學校中一二此等の點に注意せるものなきにあらざりしも、概して未だ甚だ不充分なるやの感ありたれば將來一層此等の點に力を加へ以て教授の便利を計るの必要ありと信ず。

○工具の選定及其使用法手入法に意を用ふべし

工具は製作と大なる關係を有し、工具不適當なれば決して佳良なる製品を得る能はざるのみならず、其仕事も亦愉快なる能はざるなり、然るに今回視察せし學校の中には比較的不必要なる工具を備へて必要なを逸し、又其大さの過大過小或は品質の粗惡にして殆ど使用に堪へざるを備ふるもの少からざりき、但し是等の失策は稀には經費の都合上賤價の物品を採るの已むを得ざるに出で、或は教師の之が良否を甄別するの明を缺けるに因る場合なきにあらずと雖も、其多くは購入の粗忽に歸するが如くなれば之を購入するに當りては特に豫め工具と其用途及使用者との關係を嚴密に調査し、苟も其處置を誤る勿らんことを期せざるべからず、是れ今日の學校經濟上大に注意を要すべきことならん。

又手工に於ては適當なる工具を選ぶと共に之が適當なる使用法及手入法を授くるを要す、製作の能を興ふるてふ手工教授の目的に向ひては工具の使用法手入法を授けると、物品の製作法を教ふるとは其價值に於て何等逕庭なきなり、彼「工匠の伎倆を知らんと欲せば先づ其用具を檢すべし」とは寔に不磨の至言なりとす、而も現今手工教授の大勢は工具の使用法及手入法に向ひて幾分注意を拂

ふに至れりと雖も其教授の主力は依然物品製作の上のみ注がれ、工具に就きては軽く顧みらるゝに過ぎざるが如し、今回の視察中に於ても生徒の工具を使用するに方り嚴禁に値すべき所爲を敢てし、或は研磨法を誤り、或は裏刃の切れたるを所持する者等屢々之ありしも、教師の之に對して適當の指導を興へしは甚だ稀にして、中には刃物手入の場所として最も必要なる研場の設備を缺けるものさへありき、されば向後は工具の選定に注意すると同時に又其使用法及手入法に向ひて一段の注意を加ふること、是れ亦手工教授の改善上必要の事項たるべし。

以上は技能科につきて卑見を述べたものであるが、尙ほ學校の實業科につきて一言しやうと思ふ。こゝに所謂實業科といふのは、農業、商業を主とするのである、右二科の中にて農業科は、近來農村小學校に於て特に施設すべきことになつたので、一層重要視せられ、從つて研究するの必要が多くなつてきて居る、言ふまでもなく我國農村の衰弊は、識者の大に嘆息する所之が挽回策につきてあらゆる方面より工夫し施設して居る、小學校の農業科の如きは、この農村衰弊に對する救済策とし

實業科に
つきての
所見

ては餘り薄弱であり、亦敢て之に當る必要はないので、他に農村挽回上の急務はあ
るのである、而して將來の國民たる現兒童に對して、堅實なる農業思想を與へ、且つ
農業上の趣味を興ふることは極めて必要である。苟も之を教授する以上は、實效
の擧るやうに經營せねばならぬ、又、商業科の如きも之を教授する以上は、形式的だ
けでなく、實用的の教授をなすべきである、商業實習室の設備もなく、商業上の機關
につきて指導もせず、たゞ教室内にて講義を聴き、筆記するのみにては、效果は擧が
らぬ、小學校の實業科なれば之を修めたりとて、直ちに實務に就きて、差闕へなき程
度の知識を興ふることは出來ぬ、又之を要求するは無理ではあるが、出來得るだけ
實際の役に立つ様に指導することを計らねばならぬ。今農業科につきて左に卑
見を開陳する。

六 農業科

教則第十三條に、『農業は農業に關する普通の知識を得しめ、農業の趣味を長し、勤勉
利用の心を養ふを以て要旨とす』とある、農業地方の兒童に、農業に關する知識技能
を授くるは、之をして實際生活に入るに大なる便宜を得しむることは明かである、

農村挽回
策と農業
教育

農村衰弊のことは、すでに述べた通りである、文明の進歩は農家の經濟に大變動を
與へ、尙ほ農民の精神を漸次懦弱ならしめ、其結果農家の子弟は農業を嫌忌し、滔々
相率ゐて都會に集中する、一面には小農者は、大農者に兼併せられて、農村の實際は
言ふに忍びざるものがある、近來自治制度の改善を唱へ、之が事業と相俟つて、農村
挽回策を講ずるものあれども、未だ十分でない、この際に於ける農村の子弟に農業
趣味を鼓吹することは、當を得たること、思ふ、同時に勤勉利用の心を養ひ、觀察を
精密にして、秩序、忍耐、著實の性質を養ひ、尙ほ實習を適當になさしむるに於ては、身
體上に及ぼす效力も多大なるものがある。

農業科の效力大なるものあれども、實際の成績は如何といふに、これ又極めて不出
來なるが多い、農業の書物を講義して、殆んど國語教授と擇ぶところなくして、それ
にて農業を教授したりとて得々たるものもあり、或は教師其人に不可解の事柄を
ば、注入的に教授する向もあり、學校園及び實習地といふものを設けて置くが、ホン
の兒戲に等しき指導をなして、それにて實用的の教授をなしたりとて濟まし居る
ものもある、進みて本科の要旨を貫徹するに足る施設を工夫せる向が少い、要する

現時の農
業科の不
振

に、此科に對する教授者の知識技能に到らざる點があること、教材の選擇、排列實際的でないこと、教授方法の研究及び之が教授に關する施設に缺陷あることなどは、本科成績の擧らざる原因であること、と思ふ。

農村小學校にては、農業的趣味の養成について、あらゆる施設をなすべきである。我國小學校の如き農業を教授するといふ名稱だけにて、之に關する施設に冷淡なるが多い。アメリカのサーチ氏は其著『理想の學校』に叙して曰く、『郡村の學校は宜しく少年農學校たらしむべし、周圍には必ず農園と學校林とを設け、學童をして常に天然と接觸せしめ、且つ土地に關して各種の知識を得せしめんことを要す』と、この思想は直に全米國に波及して米國都市の學校は、務めて公園又は植物園に近接するの地を擇びて之を建て、又校内にも庭園を設け、樹木の栽培をなすやうになつた。我國にても學校園を設けたり、農園を設けたりせる學校もあるが、其の規模未だ十分ならざるものが多い、農業を教授するからは、實習地を設けて各兒童に實習せしめねばならぬ、而もたゞ實習せしむるといふだけにてはいかぬ、其結果までも認め、て反省し、改良するの方途を講すべきである。小學校の實習地は、やがて其地方農

業改善の模範たるやうに經營する必要がある、又女子に對しても相當の農業實習を課すべきであるが、特に養蠶地方ならば、養蠶教育もなすがよい、小學校は其地農家の副業につきても、ある程度までも模範になるやうな施設經營をなすがよい、左に記せるは、高等小學校の養蠶教育と題して、文部省視學官の談なりとて、教育時論第九百七十三號に掲載せられたるものである。

高等小學の女生徒に養蠶を課する事は、男生徒に一坪農業を課する以上の利益あり、是は必ずしも日本と産業との關係より、斯く言ふにあらず、女子をして自ら家庭の業務に親むの美風を馴致する點に於て、頗る大なる無形の効果ある事を忘るべからず、今之を全國の高等小學に於て見るに、九州地方最も盛にして中に最も力を注ぐ處にては、校内に養蠶室は勿論、糸取の器械迄も備へ付けあり、其成績も甚だ見るべきもの尠なからず、而して特に信州地方に於ては、各小學校共殆ど普通の實業補習學校を凌駕するものあるが如し、是等は全く土地の狀況に依りて其間に自ら盛衰のあるもの、如くなるも、之を課する其方法を誤るなくんば、全國各地方の高等小學校をして此風に倣はんことを希望す、其方法とは設備

を頗る簡易にし、成る可く普通教育を傷なはざる程度に於て之を課する事なり、即ち實科時間に於て平素養蠶の大意を教授し、養蠶期に及んで學校の一隅に養蠶室を新設し、放課時間を利用して、女生徒に蠶蟲を看護せしむる事とし、漸次二眠より三眠と重要時機に達するに及んで教師は其間に多少の手加減を施して看護の時間を與へしめ、生徒の歸宅後は學校の小使又は臨時雇人をして之に當らしむる事とせば、容易に養蠶の一科を課する事を得べしと云ふ、而して男女生徒連絡を取り、男生徒をして學校園若くは學校附屬農園に桑を栽培せしめ、之を以て蠶を飼養する事とせば、更に實科教育の實績を擧ぐるに於て妙なるべしと信ず、要するに高等小學校に於ては甚しく普通教授を妨げざる限り、以上の如き實科的教育を授くるを以て國民教育の趣旨に適ふものとなすなり。

尙ほ近時盛んに唱導せらるる『一坪農業』につきて、内務省地方局日比野氏の談なりとて、普通教育に掲載せられたるものを左に紹介する、農業科の効果を發揮せんには、この種の施設こそ極めて必要のことであると思ふ。

一坪農業
につきて
の實施

實地訓練上の簡單なる施設、學生實地訓練の方法として近來諸種の施設が各

地共、大分盛に行はれてをる様子であるが、茲に小學校として誠によい思ひ付と感ぜらるるものは、静岡縣周智郡熊切村の一坪農業である。

一坪農業の由來、抑々一坪農業は静岡縣濱松の篤志家、織田利三郎氏が創案した方法であるが、氏は輸出農作物改良の熱心家で、毎度農商務省の囑託を受けて、海外各國に出張し、農業上の事を調査した人で、先年米國聖路易に於ける萬國大博覽會に際し、ウアージニア州農會の催したる青年農作品展覽會を見て大に心を動かした。其の方法は同州内に優秀なる農業青年一千名を選抜し、之に各一定の地區を課して一定の作物を耕作させ、其の收穫に耕作日記を添へて出品させた所が、大に一般の注目を惹き、其の結果同州の農業に一大影響を及ぼし、大に一般農業の進歩改良を助けたといふ事がある、織田氏は之を見て歸り、之を我國農村に適用するの策を工夫し、種々考案の結果、終に所謂一坪農業の方法を案出したので、明治四十年中、取敢へず之を郷里の小學校に實施し、好成績を得たる結果、忽ち遠近に波及し、今は同縣各郡を初め、三府二十二縣の小學校に實施さるゝ迄に至つたのである。

一坪農業の方法 一坪農業とは讀んで字の如く、一坪づゝの耕地を小學兒童に與へて、學業の餘暇各自好む所の蔬菜なり花卉なりを栽培せしめ、教師は時々培養上の注意を與へ、或は怠るものを督勵する位の外、凡て兒童自らの勤勞によりて其の收穫を舉げしめ之を聚めて品評會を開き、成績佳良なるものには賞品を與ふる制であつて、其方法は至つて簡單であるから、何れの學校でも實行が容易である、殊に農村の小學校にとつては、訓育上最も適當な、且つ有益の事業であらうと私は信するのである。

一坪農業の効果 先づ第一に之に依つて兒童の天然物に對する愛護心を篤からしむる事は勿論、教科書中には或は農業の話とか、植物學上の話などがあつて、注意深き學校では標本や模型を以て示すけれども、本當に其の知識の適確を圖り、教育の趣味を起させるには、之を實際に試むるに如くはない。此點に於て一坪農業は誠に適切なる施設たるを失はない。泥んや各自の勤勞が著々と顯はれて、日々に變化し行く植物の生長を見たならば、兒童は如何に教科書の眞なるを信じ、勞働の愉快なるを感ずるであらうかを、而して此の感動は、やがて他の學

科に對しても、亦熱心の度を増す刺激ともなり、又勤勞を尙ぶの習慣ともなるのであらう。尙ほ指導者にして、少しく注意して其の地に適當な、或は副業として獎勵するに足るべきものなどを選び、之を其栽培物に指定したならば、大に將來の爲めともなる事と考へる。且其收穫が多ければ之を共同販賣して、貯蓄の美風を養成することも出來やう。もし又之を學校の空地に應用すれば、更に面白と思ふ。否現に多くの小學校では、著々として實績を挙げつゝあるのである。其の耕地を一坪宛と限つたのは、蓋し兒童の力と、學業の餘暇とを參酌しての立案であつて、深い理屈はないのである。

熊切村の實例 今熊切村に於ける實例を見ると、之をやらせるものは尋常科五年以上の生徒で、耕地には各自家庭の空地を使用させ、之れに要する種子は、害虫驅除の獎勵賜金で購入し支給して居り、又其品評會は收穫したる産物の内で、各自の最も優良と認むるもの六品以上を學校に持ち寄せ、一定の日を期して開設することとし、審査委員には、學校職員全體、並に村農會員中の老農之に當り、農會長は其の委員長であつて、さうして此品評會に陳列した物品は、會の了ると同

時に全部之を賣却し、其收入金の幾分を賞品の費用に充て、他は二分して、各自の郵便貯金と、運動器械及び器具の買入費に加へてをるとのことである、云々。

要するに、學校の農業科は、一層實際的に施設する必要がある、よし小規模にても、整然たる經營の下に、土地に適せる實際的指導をなさば、兒童は喜んで本科に勵精するであらう従つて本科に興味を有することになり、將來健全なる農民たらんとの覺悟も出來てくる譯である、本科を實施するにつきては、各小學校にて根本的研究をなして欲しい。

結 論

以上終學年兒童の教育法につきて、其一斑を叙したるものである、訓練部に於ては、尙論すべき點多くあれども、極めて要點だけを述べたるだけで、教授法部面のやや詳細なるに比すれば、權衡を失してゐるやうであるが、こは致し方ない、自分は終學年兒童に對する訓育上、重要なことだけに止めて、他は強いて記述をしないこ

と、した、尙ほ身心の發達、部に於ても、詳細に記すべき必要もないではないが、之も概要だけに止むることにした、更に讀者の實地研究を希望するものである。

今や終りに臨んで一言せんとするものがある、こは前にも述べたことであるが、終學年教育方法をば實地につき研究するの必要なことである。我が初等教育界に於ては、すでに幾多重要な問題の研究をばなし來りて、近來は兒童それ自身の學力、體力の優越ならんことを期すべく、この點に努力すべき、所謂彼の結果主義ともいふべきもの、強く唱導せらるゝやうになつたのである、これぞ眞に教育問題の到著點である、この點に著眼するに至りしは、時勢の然らしむるところもあつたのであるが、我が教育界に於ける研究の眞摯なる方面に歸向したる適證である。而も結果を善良ならしめんには、終學年教育をば等閑視してはならぬ、否、大に之に學校の主力を傾注すべきものではあるまいか、近眼なる結果主義者は、各學年毎に分割的に結果の良好ならんことに腐心してゐる、其一日一時の結果等につきてまで苦心してゐる、これ誠に結構である。されども毎學年間に通じての結果につきて、系統的、總合的に反省しない、其特に、教育の大局に、著眼し、其學校教育の仕、上げなる、

所謂終學年兒童の學業其他につき、ての結果をば、等閑にせる傾向がある。各學校に於て毎學年の結果を反省するは、教育の中道である。終學年の教育的結果に注意せずば、學校教育は未だ責任を了したるものとは、言へないと思ふ。吾人の研究は極めて粗笨なるものなれども、冀くば之を導火として一層研究せられんことを。要するに終學年兒童に對しては、學校教育が其全力とまでは行かずとも、少くとも主力を注がねばならぬ。上級兒童の教育は一人の擔任教員に任して置けば、それにて我等には關係なし責任なしとて高見の見物で居る譯には行かぬ。終學年の教育方法、又は其成績につきては、全校教師が腦力を絞るべきである。特に終學年擔任の各教師は、時々研究の結果につきて談合し、反省すべきである。何れにせよ、全校教師の學識德行等を精鍊したる對照が、終學年兒童に影寫するものである。即ち終學年兒童の不成績は、全校教師の不成績に歸するものである。この點より考ふるも、終學年の教育につきて大に研究せねばならぬことと思ふ。

終學年の教育法に關する研究 終

大正元年十二月十五日印刷

大正元年十二月十八日發行

終學年の教育法に關する研究

定價金九拾錢

著者

中澤忠太郎

東京市麴町區飯田町三丁目十番地

發行者

辻太

東京市本所區番場町四番地

印刷者

朝岡平藏

東京市本所區番場町四番地

印刷所

昌版印刷株式會社本所分工場

不許複製	
著者	檢印

發行所

東京市麴町區飯田町三丁目

振替口座東京四〇三三番
電話番町一四五二番

開發社

賣捌所

全國各地書林

重版 出づ

本書は尋常高等全部に通じて説明せるものにて(一)文部省編纂委員同挿畫擔當係員、帝國大學史料編纂官等に質し其非常の手續を煩し(二)又挿畫の原圖を提供せる根本の人々に質し一々其原圖に照し合せて説明し(三)一公三伯二子七博士六教授の援助を得(四)又親しく其地を踏査し(五)外國に關するものは各國に照合し(六)又説明上數十の平面圖を挿入する等念にも念を入れたる爲世の多くの教授書が教科書と共に出版するに反し後れに後れて今日漸く公表せられたり

文學博士 吉田東伍君序 湯本武比古君序
東京帝國大學教授 脇水鐵五郎君序 柵茂策君著

國定教科書 插畫 解說 附研究法

訂正再版 歷史教科書篇 新刊 地理教科書篇

菊判全一冊約三百頁 定價五十錢 郵稅六錢
菊判全一冊四百餘頁 定價七十五錢 郵稅八錢

二金 送八 料錢

發行所 東京東區飯田町
開發社 (二二〇四東京東替派)

歷史地理教科書の挿畫説明は本文教授よりも一層困難にして尙且讀本修身等の挿畫と異り出處正しきもの多ければ机上の臆説想像の説明を許さず故に是非解説書を要するとは當局者の言にして且教育界一般の聲也
從來輕視せられし此研究も近來「挿畫は如何に取扱ひ教授すべきか」として新方面の研究の聲が到る所に高まるに至れり
此時代要求に應じ其「研究法と教授法」とを各篇に解説と共に併せ説きたるは只本書あるのみ
尙附録として歴史篇には難語の讀方と解釋あり即ち「尊と命」「武藏守上總介常陸様」「皇后中宮女御夫人更衣」「太子皇子親王内親王」「公卿公家公方」「大師權帥朝臣等の解は其一例也

253
118

終

